

三省堂 高校英語教育

2015年 夏号

巻頭エッセイ

「いずれか」ではなく「いずれも」 渡辺 靖 …… 1

特集

私の「英語教育論」

- 中学英語からの卒業～高校英語教育のTop Priority～ 金谷 憲 …… 2
- 英語教育を取り巻く「神話」について考える 霜崎 實 …… 6
- 日本の英語教育が抱える3つの二重機能
～高校の場合を中心に～ 森住 衛 …… 10
- グローバル化と英語教育 金子 朝子 …… 14

授業研究

- 良い教材と出会うことの喜び 金森 智恵子 …… 18
- Oral Introductionから始まる生徒の
意欲的な活動を促す英語の授業 嶋田 容子 …… 21
- 目標はやはり「使える英語」! 志村 康秀 …… 25

2015年度センター試験の分析と対応 渡辺 聡 …… 28

シカゴ便り 横川 博一 …… 表紙裏

表紙写真について 田嶋 美砂子 …… 表紙裏



シカゴ—いろいろな人が行き交うハブ都市

神戸大学 横川 博一

オヘア国際空港—アメリカに飛んで、多くの人がまず降り立つのがここシカゴにある空港だ。かつては離着陸回数で世界一だったこともある巨大空港は、今も世界の多くの人が行き交うハブ空港となっている。

シカゴと言えば、映画『アンタッチャブル』(The Untouchables)を思い浮かべる人もいようだろう。ご存知、マフィアのボス、アル・カポネと彼を逮捕しようとするアメリカ財務省の捜査官エリオット・ネスらのチーム「アンタッチャブル」の闘いを描いた作品である。シカゴ発着の長距離列車はすべてここを通ると言われるユニオン・ステーションの階段は、最後の銃撃戦のシーンが撮影されたことでも有名である。

ミシガン湖からは、ニューヨークにあるワールドトレードセンターに次ぐ高さを誇るウィリス・タワー (Willis Tower; 写真では左側の一番高い建物) がまず目に飛び込んできて、多くの摩天楼が広がっているのが印象的である。農業、工業ともに盛んでシカゴの経済活動を活発にしてお



り、まさに、アメリカ第三の都市を象徴したものと言える。

街には、シカゴ大学、シカゴ公共図書館、シカゴ美術館、シカゴ自然史博物館、グラン

ト・パークなど多くの大学や文化施設があり、学術文化都市シカゴと言われる所以である。

いろいろな人が行き交うシカゴは、白人だけでなく、いわゆる African-American も多く、ブルースやジャズなどの音楽をはじめ多様で豊かな文化を形成しているのも、シカゴの魅力である。

ダウンタウンを南に下ると、ノーベル賞受賞者を多く輩出しているシカゴ大学のあるハイドパーク地区に到着。この地区には、アメリカ合衆国大統領バラク・オバマの自宅(写真左奥)が、厳重な警備のもとにある。オバマは、シカゴ大学のロースクールで教鞭をとっていたこともある。



大統領選に勝利した2008年11月5日、地元シカゴのグラント・パークで彼はこう演説した: "It's been a long time coming; but tonight, because of what we did on this day, in this election, at this defining moment, change has come to America."—"ここまでたどり着くのにすいぶん長い時間がかかりました。しかし、今晚、今日と言うこの日、この決定的な瞬間に、この選挙で私たちが成し遂げたことで、アメリカは変わったのです。"と。そして、"Yes, we can."—"私たちはできるのだ、と。

表紙写真
について

シドニーの旧正月

元星美学園中学校・高等学校

田嶋 美砂子

今年2月中旬、私はシドニーの空港に降り立った。通常であれば、'Welcome to Sydney'の文字がそのことば通りに出迎えてくれる到着ロビーでは、代わりに'CNV 15'というロゴとヒツジのイラストをほどこした旗が目に入ってきた。'Chinese New Year 15'の省略形と今年の干支である。この旗は空港だけでなく、シドニー中心部の至るところにも掲げられていた。場所によっては、新年の挨拶の1つである「恭喜發財 (Kung Hei Fat Choy)」を記したのも見受けられ、旧正月を街全体で祝おうとする様子がひしひしと伝わってきた。日本で1月1日を迎えた私にとっては、一味異なる「2回目」の正月。MY WAY English Communication IIのLesson 2 New Year's Celebrationsを思い出しながら、市内を歩いてみることにした。

旧正月の場合、祝賀期間は2週間以上にまたがることが多い。シドニーでも、今年の新年第1日目にあたる2月19日を挟み、13日から3月1日までの17日間、実に多くのイベントが開催された。市が発行しているガイドブックによると、パレード・音楽祭・映画祭・芸術作品の特別展示・マーケットなどに加え、羊毛を紡ぐ講座や機織り体験

といったユニークな催し物も企画されており、今年が未年であることを全面に押し出した内容であった。

祝賀行事のハイライトは恒例のドラゴンボートレースである。龍の形を模した各ボートには20名の漕ぎ手の他、太鼓を叩きながら漕ぎ手を鼓舞するドラマーと船尾で針路を定める舵取りが乗船し、直線200メートルの速さを競い合う。レース場となるのは観光名所の1つ、ダーリングハーバー。数多くの観客が見守る中、大会前には各ボートの龍の目に赤い点を描いていく Eye Dotting Ceremony も開かれた。この儀式により、龍を目覚めさせ、水の安全を祈願するそうである。

ドラゴンボートレースそのものの起源は2千年以上前の戦国時代に遡るといわれている。その後も長きに渡り、主に中国系の人々にとっての文化的行事であったが、最近では新しいスポーツとして確立し、世界各地で国際大会が開催されるまでに発展している。ダーリングハーバーでも、初日は競技チームによるレース、2日目はローカルコミュニティや企業、各種団体チームによるレースと、2つのカテゴリーが用意されていた。しかし、いずれにしても、参加者・観客のエスニシティなどはもはや関係なく、カラッとした青空と暖かい日差しの下、レガッタ好きが集まって。中国で始まったドラゴンボートレースであるが、「ビーチ文化」を誇る港町シドニーで、新たな意義が生み出されている。

「いずれか」ではなく「いずれも」

文化人類学者 渡辺 靖



「国民国家は大きな問題を扱うには小さすぎ、小さな問題を扱うには大きすぎる。」二十世紀を代表する社会学者ダニエル・ベル（ハーバード大学教授）がこう喝破したのは一九八七年。やがてグローバリゼーションの進展とともに、国民国家の機能や権限の限界が指摘されるようになり、地域連合（EUやASEAN、AUなど）や国連機関といったより大きなユニット、あるいは、地方自治体や地元コミュニティといったより小さなユニットへの関心が急速に増していった。

このことの文化的意味は決して小さくない。従来の「国民国家」を中心とした歴史観（一国史観）や言語観（国語観）は見直しを迫られるようになり、一方では、国家をまたいだ（あるいは国家権力を中心に据えない）歴史や、国際的な汎用性の高い言語の必要性が指摘され、もう一方では、郷土史や少数言語、移民言語、方言の大切さが叫ばれるようになった。

もちろん、国民国家というユニットが不要になったわけではなく、ロシアのクリミア併合のようなグロテスクな現実も存在する。一国史や国語（ないし公用語）の重要性はあり、中国や韓国のように自国語の海外普及を強化している国家も少なくない。

要するに、例えば、言語に関する限り、インターナショナルな言語、ナショナルな言語、そしてよりローカルな言語の三つのいずれも重要になっているのである。「いずれか」ではなく「いずれも」である。もちろん、フランス語やスペイン語もインターナショナルな言語には違いないが、最も汎用性が高いのが英語であることは——その善し悪しや好き嫌いは別として——多言を要しない。

もっとも、そうとはいえ、日本国民全員が英語に堪能になることはハードルが高く、かつ現実的には不要であろう。あくまで、将来、高度なプロフェッショナル（職業人）を目指す若者には——ジャンルによって求められるレベルはさまざまだろうが——単なるサバイバル英語、すなわち日常会話レベルを超えた運用能力が求められているのである。

ただし、その際、忘れてはならないのは、英語がよりグローバル化するにつれ、英語そのものもローカル（現地）化され、ますます多様化している点である（そう、まさに中世におけるラテン語のように）。それゆえ、アングロサクソン系の英語にコンプレックスを抱くような時代はとうに過ぎ去り、インド訛りでも中国訛りでもベルシャ訛りでも一向に構わない時代になった。その点、近年、私の周りでも、日本訛りの英語を恥じることなく、堂々と海外に調査に出かけ、ゼミなどでも積極的に発言する大学生が増えているようで、実に頼もしい。しかも、彼ら彼女たちの大半は、それまでずっと日本で過ごしてきた子たちである。ただただ、高校の英語教師の方々の導きの賜物だと感謝する次第である。

最近、学会でアラブ首長国連邦のアブダビを訪れたが、彼の地では、国の方針として、大学の授業はすべて英語で行なわれている（日常生活は主にアラビア語）。日本の大学でも英語による授業が奨励されるようになってきているが、半面、自国語で高等教育を提供できる国は、実は、世界でもそう多くない。その意味で、自国語で大学院の学位すら取得できる日本はもっと誇りを持って良い。そのうえで英語と日本語の折り合いをどう付けるかは知恵の絞りどころだが、明らかかなことは、「いずれか」ではなく「いずれも」必要という点だ。

●プロフィール：1967年北海道生まれ。上智大学外国語学部卒、ハーバード大学博士号取得（社会人類学）。2005年より慶應義塾大学SFC教授。ケンブリッジ大学フェロー、パリ政治学院客員教授、朝日新聞や読売新聞の書評委員などを歴任。『アフター・アメリカ』でサントリー学芸賞。2005年日本学士院学術奨励賞授賞。1999年より『CROWN』編集委員を務める。

特集 私の「英語教育論」

中学英語からの卒業

～高校英語教育のTop Priority～

東京学芸大学名誉教授 金谷 憲

高校英語教育のTop Priority

学校英語教育のtop priorityは、基礎力の定着である。小中高すべてを挙げてこの目標実現に取り組まなければならない。既に、2000年にはこの目標設定についてELECがCrossroad Projectで政策提言を行っている。詳細は、参考資料を参照していただきたいが、この提言では、中高6年間で中学英語をマスターすることを目標にかかげている。そして、それ以上に英語を必要とする人については、それなりに学習できるようにするとして、学校英語では、中学英語からの卒業を必ず実現するためにあらゆる努力をすとしている。以下にこの目標を軸として私の英語教育論を展開したい。

「何年も習っているのに使えない」というのは、大昔から繰り返されている日本の英語教育への批判である。中高6年（今後は小学校が加わる）も習っているのに簡単な英語が聞き取れない、短く単純な英文を発することができない、つまり「使えない」というのである。

使えないのは多くの場合、基礎力が定着していないからだと思ふ。ここでの英語の「基礎」とは、中学で習う英語のことである。

中学英語が出来ないと考えるか、大丈夫だと考えるかによって、高校英語教育の課題が変わって来る。もし、基礎が大丈夫であると考えれば、問題はその先である。高校ではより高度な表現の獲得、達意の文章を作成する力、説得力のあるスピーチをする力、丁々発止と議論できる力などに課題を求めることになる。

しかし、現実はそのようではない。中学を卒業した生徒であっても、中学英語はまだ卒業していない生徒が大多数である。文科省の中学全校調査(2011)でも、中学卒業時に英検3級を取得、または受験すれば取

得できると考えられる生徒は全体の25.5%である。私は仲間と10年間以上、中学生の主語把握プロセスを調べているが、中学卒業時で主語となる名詞句がちゃんと把握出来ている生徒も、偶然に上記文科省調査とほぼ同じ3割程度である(詳細は金谷編(2015 予定)参照)。これでは、基礎は大丈夫とは言えない。

英検3級を取得していても、中学英語を自由に駆使できるとは限らない。私の考えでは「定着」している状態とは、中学英語が自由自在に操れるということを意味する。語彙は別として、中学の範囲であれば聞いて直ぐ理解し、即座に応えることもでき、この範囲の読み物であれば、そこそこのスピード(150～200WPM)でザッと読んで、大意を把握出来る、などなどである。

具体的にイメージした方がよいので、単純な課題で考えてみよう。次のようなことを高校生が出来るかどうか、考えてみてほしい。下記は、中学検定教科書3年用のThe Story of Sadakoの第1パラグラフである。各センテンスを生徒に聞かせて2～3秒おいて、repeatさせる。あるいは、印刷されたものを生徒に配って、1センテンス毎に短時間(数秒)黙読させて紙を伏せてそのセンテンスを書かせる、といった活動をイメージしてほしい。

It began with a flash. On August 6, 1945, an atomic bomb was dropped over Hiroshima. The bomb destroyed the city. At least 130,000 people died by the end of the year. But two-year old Sasaki Sadako survived.

(p. 40, NEW CROWN English Series 3, 三省堂)

どうだろうか。高校生は出来るだろうか。また、the Story of Sadakoの文章全体(上記のパラグラフの約5倍)を上記した「そこそこの」スピード(150

～200WPM)で読み終わり、大意把握ができるだろうか。

実際のコミュニケーションはこうした活動よりずっと複雑で難しい。したがって、今ここに例示したような活動が出来なければその先は無理ということになる。

高校の先生方は、中学英語を持ち出すと、「それは中学の英語教師に言え。われわれは高校で教えているのだ」と言いそうである。しかし、中学英語の定着は中学段階だけでは本来無理である。言語の習得には導入時から多くの時間を要する。中学で「わかる」ところまで行っても、「使える」まで行くのは高校入学以降のことである。中学英語の定着は高校の仕事でもある。

「高校では新たに導入される文法事項などがあるし、大学入試があるので中学などに構ってられない」という声が聞こえてきそうである。しかし、どんな事情があるにしても、土台が出来ていないところへ、新しいものを乗せようとしても、無理である。土台が出来ていないところへ柱を立てようとしても、柱は立たない。柱がちゃんと立っていなくては屋根を葺くことはできない。

大学入試にも土台が必要である。大学入試問題に解答するにあたって、中学文法で大体解けるとい調査結果もある。アルク教育総研レポート(2015)によると、語彙がすべて分かっているという前提で、中学文法のみで解答できる問題は79%、ちょっと機転を働かせるとできる問題を含めると89%ということである。中学英語が、いかに大切かがわかるだろう。

定着には「重ね塗り」と「発表」

高校で中学英語定着のためにやらねばならないことは、「重ね塗り」と「発表活動(production)」である。「重ね塗り」とは漆塗りのように、下塗りから何度も上に塗り重ねていって完成するような過程をイメージしていただければよいと思う。

ごく常識的に言って、一度だけ習えばそれ以後絶対に忘れないといった人はいたとしても、例外中の例外だろう。しかし、多くの高校の授業では、1度授業で扱った課は2度と扱われない。1度使った教材は2度と使われない。これで、習ったことは身につくだろうか。

習ったことを学習し直して、定着をより強固にしてゆくことが絶対必要である。その場合、1回目とまったく同じことを繰り返すのではない。1回目がパート毎の精読で内容を掴んだとすれば、2度目は1課分通して読んで英問英答で理解をみるなどの方法をとる。逆でも良いわけで、1回目は大雑把に読んだので、2回目、3回目は精読でも構わない。「繰り返し」という言葉ではなく、「重ね塗り」というやや馴染みの少ない言葉を使わせていただいたのはこのためである。

学習に目的を設定することも必要だ。発表活動を学習のゴールにすると、生徒たちの真剣みが違ってくる。「重ね塗り」をさせても生徒は飽きることはない。

「重ね塗り」と「発表」へのとり組み

「重ね塗り」と「発表」が大切ということに賛同いただけても、実際に高校の授業内にこの2つの要素を取り入れるのは、容易なことではない。重ね塗りをするにはそれなりの時間がかかるので、全体量を減らさないと出来ない。発表活動にはもっと多くの時間がかかる。したがって、まず、時間を絞り出す必要が出てくる。教室で扱う事項の取捨選択が必要になるし、適切な教科書の採択も必要になる。教科書が難しいと意味理解に授業時間を使い果たしてしまうし、難しい内容を英語で表現することも到底出来ない。

こうした障害を乗り越えて、重ね塗り、発表活動を可能にしようという取り組みは各地で行われ始めている。ここでは、私が直接関係している2例だけをご紹介します。

山形スピークアウト方式

この方式は、6年前に山形県立鶴岡中央高校でスタートした。まだ、旧カリのころである。スピークアウト(以下SO)という学校設定科目を作る。この科目では、高1で使った英語Iの教科書のいくつかのレッスンを高2でも使い、復習してから何らかの発表活動(role play, skit, debateなど)まで行うというものである。

高1の時に8時間ほどかけて、主に内容理解までたどり着いているレッスンに、2年のSOで更に7、8時間かける。例えば、animal therapyについて高1

で読んだら、高2ではanimal therapy clinicの職員と患者のrole playを最終ゴールとして、復習や発展練習を行う。手塚治虫について英語で学んだら次の学年では、手塚治虫に生徒が扮し、他の生徒が聞き手になってトーク番組を作るなど、発表活動を最終目的に、前年度習ったレッスン内容を復習するというものである。高2、高3でも同じ方式を使う。つまり、高2の英語Ⅱの教科書を使って、高3のSOで同じように発表活動を行う。

この結果、鶴岡中央高校では、生徒たちは英語を書いたり、話したりすることに抵抗感がなくなり、外部模試の成績も、1年から2年よりも2年から3年にかけての伸びが大きい傾向にある。また、英文の読み方なども、重要な情報を探すなどといった工夫を生徒自らすることが観察されている。

鶴岡中央高校では学年設定科目を利用しているが、科目を新設するのは一般的に容易ではない。この点を改善したのが同じ山形の県立山形西高校である。こちらでは、夏休み、冬休みなどの講習や年度末の期間を利用してSO活動を行う。鶴岡中央高校が6年取り組んでいるのに対して、こちらはまだ3年目を終了したところだが、SO第1期生(2015年3月卒)の成績は、外部テストでもセンター試験でも有意な伸びを見せている。SOの汎用モデルとして他の学校が真似しやすい形だと言える。

田名部方式

学年をまたいだり、同じ年度であっても一定のインターバルを置いて、重ね塗りをを行うのが山形SOであるが、一気に発表活動まで持って行く取り組みも行われている。

こうした取り組みで注目されるのが青森県立田名部高校の方式である。全てのレッスンで重ね塗り、発表をやらせていては時間がかかりすぎる。そこで、田名部高校では、レッスンによって扱い方に軽重をつけることにした。これが田名部方式の基本コンセプトである。コミュニケーション英語で、教科書のレッスンを「こってりコース」と「あっさりコース」に分ける。これを更に2つずつに分けて、「超こってり」は15時間をかけ、最後にはperformance testを行う。「普通のこってりコース」は10時間をかけて発表活動をゴールとし、performance testは行わない。これに対して、「あっさりコース」は、4時間コースと

2時間コースに分かれる。授業では、その場でザッと全体を読んで簡単な質問に答える、全体を聞いて内容チェックの問題に答える、などと簡単に済ませてしまう。

このようにメリハリをつけることで、繰り返し練習の機会と発表の機会を確保するとともに、軽くではあるが、教科書のレッスン全部を扱うことが出来る。Performance testの実施も学年で複数回実施することが出来る。

「重ね塗り」「発表活動」へ舵を切るために 学校では

高校での「重ね塗り」「発表」を実現するためには英語科全体で取り組む必要がある。山形や青森での取り組みは、個々の教師が単独で行うことはできない。学校設定科目を作るには当然、英語科全体はもちろん、学校全体の同意が必要である。田名部方式を採用するにも、同じ科目の複数の担当者で「あっさり」と「こってり」が同じでなければ共通の定期考査を行うことは出来ない。

学校で取り組むためには当然、話し合いが必要である。学校現場が年々多忙になっていることを考えると話し合いを持つのはなかなか難しい。しかし、相談しなければ新しいスタートを切ることは出来ない以上、どうにかして話し合いの場を作ることが必要である。

話し合いの場を設けるのが第一の関門であるとすると、第2の関門はその話し合いの場を、自由に自分の意見をぶつけ合える場にすることである。仲間内の議論ではいろいろなことを想い、どうしても本音で勝負出来ない。しかし、自由に話し合うようにすることが改革実行のキーになる。私の経験でも、成功した学校は例外なく自由な話し合いが可能になっている。

英語科内に良いリーダーがいれば良いが、そうでない場合には外部アドバイザーなどの利用が役立つ。外部の人間が入ると、人間関係の構造が変わって話し合いやすくなる。また、外部の人を入れておくと、話し合いの機会が存続する確率が高くなる。内部の人間だけだと、さまざまな学校の事情により、機会を中止したり日程を変更したりしている内に、会の開催が億劫になってしまい、話し合いの機会が自然消滅することが多い。

国、地方自治体(教育委員会)では

重ね塗り、発表の機会を確保するためには、もっと大きな単位での解決策も必要となる。国のレベルでは、学習指導要領の作り方を変えて行く必要がある。現在は、小中高それぞれの段階でどう指導すべきかの大綱が示されているだけだが、学習指導要領自体に重ね塗りの発想を取り入れることが求められる。例えば、中学で導入された事項をその後どのように展開してゆくかといったことが、学習指導要領に組み込まれる必要がある。

教育委員会レベルでは、現職研修についての工夫をすべきである。校内研修によって、授業を変えて行くことをしなければならぬ。教師の多忙化とも併せて考えると、学校外に教員を集めて研修を行うのは徐々に難しくなっている。むしろ、指導主事やその他の外部人材を学校に派遣して、頻りに話し合いを持ちながら、その学校の授業改革を推し進めるようなスタイルが望ましい。文科省や自治体が現在行っている拠点校方式が有望ではないか。拠点校を研究の中心として、そこで得られた研究成果を地域全体、県全域に広めて行く方式である。

また、拠点校は研修のセンターとしても機能するので、初任者を拠点校に配置して、教師としてのキャリアの早い内に、学校ぐるみの改革を経験させると

〈参考資料(文献・DVD)〉

ELEC (2000) Crossroad 政策提言 https://www.elec.or.jp/teacher/crossroad_jp.html

文科省(2011)『『国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策』に係る状況調査』

http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1318780.htm

金谷憲編著(2012)『高校英語教科書を2度使う!山形スピークアウト方式』アルク選書

高橋貞雄他(2013) *NEW CROWN English Series*, 三省堂

金谷憲監修(2014) DVD『教科書を2度使う!山形スピークアウト』ジャパンライム

アルク教育総合研究所(2015)アルク英語教育実態レポートVol. 2 <http://www.alc.co.jp/company/report/>

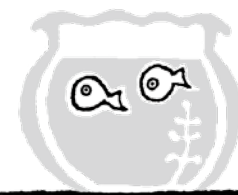
金谷憲他(2015 予定)『中学英語いつ卒業? ~中学生の主語把握プロセス~』三省堂

良いと思う。首都圏のように採用者数が多いところはなかなかうまく行かないかもしれないが、その他の道府県になると幸か不幸か初任者は多くない。そういう場合には、限られた数の拠点校に配置する余地はあると思う。

結び

使える英語が身につかない、というのは日本人が長らく持ち続けている不満であり、裏返せば「使いたい」願望の強さを示している。使えないことの原因はたくさんある。解決策はいろいろな形で提案されている。昨今でも、「英語の授業は英語で」、「大学入試にTOEICを」、「論理的思考をせよ」等々の議論がなされている。それぞれに傾聴に値する部分を含んでいるが、根本的課題から目を背けている嫌いがある。派手な方策に目を奪われ、基礎を培うという地味な仕事を諦めてはいないだろうか。

もっと常識に立ち戻り、そして勇気を出して、基礎をどのようにしたら身につけることが出来るかを具体的に試して行くことも考えるべきである。1度習っただけでは身につかない。直ぐに使うつもりもないスキルが身につくわけがない。英語教育の基本的な課題に粘り強くチャレンジすることこそ、年々の不満を解決する策であると私は確信している。



英語教育を取り巻く「神話」について考える

「CROWN」シリーズ代表著者
慶應義塾大学 霜崎 實

はじめに

昨年暮れの押し迫ったころ、編集部の田村優光さんから原稿執筆依頼が届きました。「長年、英語教科書の編集に携わってきた経験をもとに、日本の“英語教育省”の大臣になったつもりで、独自の英語教育論を書いてほしい」という依頼内容でした。

以降、このテーマがときどき脳裏をよぎることがあったのですが、「大臣」経験のない私は論点を絞ることができないまま、時間だけが無為に過ぎてしまいました。付け焼刃的な英語教育論を開陳することは本意ではありません。そこで、本稿では、英語教育に関するまとまった論考を試みることは諦めて、自由な観点から英語教育の在り方について考えてみたい。そんな思いから、英語教育を取り巻くさまざまな「神話」（一見、正論のように見えるが、実は根拠の薄い思い込み）を想定し、それに対して思いつくままに私見を述べていきたいと思えます。

英語教育に関する「神話」を見直すことで、英語教育に対して新たな展望を与える契機になるのではないか。知らず知らずのうちに私たちの思考や行動を規制している「神話」から解放されることで、より創造的な英語教育の構築に向けて新たな一歩を踏み出すことができるのではないかと思います。

一神話①：「外国語としての英語を学ぶ必要のない英語母語話者は、不当に優位な立場に置かれている」

英語を使えることが当然のようなグローバル化した現代は、英語を苦手とする学習者にとって、住みにくい世の中だと感じるかもしれません。英語圏に生まれ育った場合、世界共通語（lingua franca）のひとつとしての英語を容易に習得できる一方、日本で生まれ育った場合、日本語のほかに、外国語として

の英語習得に膨大な時間と労力を強いられるのは、不公平のようにも思われます。確かに、日本人が英語圏を旅行する場合、英語で意思疎通することが当たり前とされるのに対して、逆に英語の母語話者（以下、N.S.）は、日本でも英語が通じるという前提で旅行できるわけですから、一種の不公平感は否めません。しかし、発想を転換してみることもできるのではないのでしょうか。母語のほかに外国語を身につけることで、自分の言語や文化を相対化し、世界を複眼的に見ることが可能になります。新しい言語を身につけることは、世界を新しい窓を通して見ることもあります。英語を学ぶことは、自分の世界観を広げるために、きわめて重要な役割を果たしているのです。最近の認知心理学の研究においても、二言語併用者の認知能力（とりわけ共感能力）は、一言語の話者と比較して、より優れているということが実証されつつあるようです。このように考えると、日本人の英語学習者は英語のN.S.に対して、逆に優位な立場に立っているとみることもできるのではないのでしょうか。

一神話②：「英語を学ぶには特別な才能が必要だ」

Aさんは数カ国語をマスターしているので語学の才能がある、といった文脈で「語学の才能」という言葉が使われることがあります。しかし、ヨーロッパのような地理的環境において複数言語を習得することは、決して珍しいことではありません。日本人が語学を苦手とする傾向があるとすれば、それには環境的な要因が働いていると見るべきでしょう。考えてみれば、人間は誰も言語習得の才能を持っています。幼児期において、私たちはものの数年間で母語を習得したではありませんか。もちろん母語の習得と外国語学習とは、さまざまな条件が異なりますが、英語学習の成功・不成功を、あまり根拠が

あるとも思えない「特別な才能」の有無に帰してしまうことはできません。そもそも「特別な才能」を前提とする限り、日本における英語教育は成立しない、といっても過言ではないでしょう。

一神話③：「英語教育の基本は読むことよりも、話すことにある」

母語習得モデルに基づいて、外国語習得についてさまざまな言説が作られることがあります。例えば、幼児は早い段階で「話す」ことを始めるので、英語教育においても「話す」ことから始めなければならない、というのがその一例です。確かに、英語の発音も分からずに、読むことはできませんから、その意味で、この説には一理あると言えるでしょう。しかし、小学校の英語教育はともかくとして、中学・高校での英語教育において、あくまでも「話す」ことの優位性に基づいて教授法を設計するのは、あまり現実的だとは思えません。基本となる4技能は、相互に関連していますので、それらを独立させて学習の順序付けをすることにどれほど意味があるのでしょうか。

事実、「読む」能力は、「話す」能力と密接に関係しているように思えます。読解力の養成は、幅広いテーマについての背景的な知識を得るために必要です。そうした背景的知識があれば、当該のテーマについて意味のあることを口頭で伝えることにつながるでしょう。また、「音読」することは、英語の思考回路を身につけることに通じており、それは「話す」能力にもつながっていくはずなのです。「話す」ためには、会話独特の表現や、場面に即した表現などを身につける必要がありますが、場面に応じて当意即妙に対応するためには、そもそも英語の思考回路が内在化されていることが前提になります。日本における英語教育の場合、「読む」ことは、「話す」ことを支える重要な能力だと言ってもよいでしょう。

一神話④：「読解の訓練のためには、難解な文章を文法訳読方式で学ぶことが一番だ」

伝統的な訳読式の英語教育においては、難解な英語の文章を一文ずつ取り上げて、文法構造について微に入り細にわたる説明することが行われてきました。あたかも謎解きをするように、構文の解説と意味解釈をするのが、英語を学ぶ本道のように思われ

ていた時代があったことは事実ですし、現在でも一部の学校においては読解中心の授業が存続しているものと想定されます。あたかも数学の難問を解く場合のように、英文は難解であれば難解であるほどよい、という考え方がその基底にあるようです。なるほど、このような英文の読解に取り組むことは、ある種の知的訓練になりますし、学習者にとっても、「謎」が解けたときの知的喜びは決して小さなものではないのかもしれませんが、しかし、「英語コミュニケーション」においては、学習者に身の丈にあった教材を提供したほうがよいのではないかと考えています。学習者の興味・関心に訴える教材を取り上げ、学習者は自らの経験や背景的知識を総動員して内容理解に取り組む。このほうが、はるかに大きな教育効果があると考えます。そのためには、英文の読解を取り上げるにしても、単なる文法訳読に陥ることなく、よりinteractiveな方法を模索・推進する必要があるものと思います。

一神話⑤：「英語は暗記科目だ」

受験勉強との関連で、「歴史」や「英語」は暗記科目だと決めつけられるようですが、果たしてそうでしょうか。もちろん、どんな科目にしても、記憶に留めなければならない要素が皆無という科目はないでしょう。英語学習に際して、数千の単語を習得し、さまざまな文法的知識を身につけるためには、それなりの記憶の負担があることは事実です。しかし、暗記だけで英語の力がつくわけではありません。英語と日本語訳を関連づけて暗記するだけでは、英語を使いこなす能力を身につけることはできません。その語が、どのようなコンテキストで、どのような意味合いで使われるのかを、多くの用例を通じて内在化することが必要になります。表層的な暗記だけでは、英語の上達はおぼつかないでしょう。また、最終的には、まとまった英文を読み込み、解釈し、自分の意見を表明するところまでを英語学習の射程に入れて考えたとき、単なる暗記だけでは不十分であることは一目瞭然でしょう。

一神話⑥：「英語コミュニケーション」は受験勉強には役に立たない」

「英語コミュニケーション」の教科書ばかりやっても、受験英語の役には立たない、という意見が



あります。どうも、教科書はおしなべて受験には直結しないという思い込みから、教科書を軽視する考え方です。私が教科書編纂に関係していることから、少しは教科書鼻眞になっているとしても、「受験英語」と「教科書英語」を背反するものとして捉える根拠は弱いのではないかと考えます。そもそも、「イギリス英語」や「アメリカ英語」があるという意味で、「受験英語」や「教科書英語」といった異なったタイプの英語があるわけではありません。一般論ですが、教科書の英語ほどよく吟味された英文はありません。教科書だけで充分という意見に与するものではありませんが、教科書を最大限に活用することで、英語の基礎を固めることができることは確かなのです。その上で、教科書で扱われているテーマについて興味・関心が湧いたとすれば、そのテーマについて、例えばインターネットを活用して、様々なホームページに掲載されている英文やプレゼンテーションなどに接することも大切でしょう。要は、教科書の潜在力を十分に活用する想像力と積極性が必要だと考えます。「教科書英語」と規定することで、その潜在力の活用を自ら放棄するのももったいないことだろうと思いますが、いかがでしょうか。

一神話⑦：「パターン・プラクティスは百害あって一利なしだ」

1960年代から1970年代の初めにかけて、いわゆる<パターン・プラクティス>が大流行だった時代があります。この教授法が放棄されたのには、いわゆる行動主義心理学に基づいた教授法から、コミュニケーションアプローチへの切り替えが進行したという事情があります。現在では、はるか歴史の彼方に埋もれてしまったわけですが、本当に、この教授法は完全に放棄されるべきものだったのでしょうか。実は私が大学生だった1970年代の初めには、まだこの教授法を積極的に実践されている先生がいらっしゃって、実際にこの教授法を体験した記憶があります。この教授法が万能だと主張したいわけではありませんが、英語とは統語構造や表現の型を異にする日本語を母語とする英語学習者にとって、その有効性は現在でも失われていないものと考えます。英語の構造を内在化させるためには、英語の表現の型を徹底的に習得するプロセスが不可欠なのです。温故知新の精神で、この教授法を進化させることは不

可能ではないと思いますが、いかがでしょうか。

一神話⑧：「日本人英語学習者は英語の発音はネイティブのようにはできない」

スウェーデンの人たちの話す英語を聞くと、英語の母語話者と変わらない流暢さと発音の自然さに驚かされます。一方、日本人の英語は、かなり流暢な人でも日本語のアクセントが色濃く残っていることがしばしばあります。確かに、スウェーデン語と英語のように、言語的な距離が近い場合には、言語習得も効率的に進むのに対して、日英語のように異質な言語の場合には、とりわけ発音面での習得に困難を伴うことは事実でしょう。特に中学校以降に英語の習得を始めた場合には、発音面で苦勞する学習者が少なくありません。しかし、そうかと言って、日本人がN.S. のようにとまでは言わなくても、それなりに自然な英語の発音を身につけることは教授法の工夫と学習者の努力次第で可能であることも確かです。英語音声学の基礎とまでは言いませんが、英語の単音の発音の仕方、リズムやイントネーションに特化した指導の工夫が望まれるところです。

一神話⑨：「留学しさえすれば、英語は楽に習得できる」

私が初めて海外留学をしたのは、1972年のことでした。その当時は、アメリカの大学で学ぶ日本人留学生の数も少なく、アメリカは遠い外国という存在でした。現在では日本人の留学生数が一時期と比較して減少しているとはいえ、1972年のころと比較すれば圧倒的多数の日本人が留学の機会を得ているものと思います。高校生や大学生で英語圏に留学する人たちの多くが、英語習得を目的にしているのですが、果たして留学すれば英語の習得が楽にできると言えるのでしょうか。若い時代に長期間(少なくとも1～2年程度の期間)、英語圏での生活を体験することは確かですが、だからといって「楽に英語の習得ができる」とは言えません。長期に渡って英語圏での生活経験を持つ帰国子女の場合でも、流暢に英語を話す反面、的確な英文を書く能力を身につけていない学生が、少なからず存在しているというのが実情なのです。長期間の英語圏での生活は、必ずしもバランスのよい英語習得を保証しない、と言えます。

留学は現在の若者にとって比較的现实可能な夢かもしれませんが、英語運用能力を身につけるには、それなりの努力が必要なことは言うまでもありません。

一神話⑩：「英語母語話者に聞けば、何が正しい用法なのか、すぐに判断できる」

英語の語法などについて判断に迷ったとき、N.S. の意見を聞いてみることは、英語教師ならば、誰でも経験のあることでしょう。斯く言う私も、教科書の執筆・編集にあたっては、N.S. との協同作業の際に彼らの意見を求めることは、しばしばあります。しかしその際に、一人のN.S. の意見を鵜呑みにしないという姿勢が大切です。N.S. といっても、さまざまなバックグラウンドを持っていますから、同じ表現に対する語感が微妙に異なる場合もあります。N.S. のAさんがOKと言っても、同じN.S. のBさんは使わないという場合さえあります。英語にも、さまざまな「変種」が存在しているわけですから、N.S. の言語直観(linguistic intuition)もそれに応じて異なっている場合も少なくありません。したがって、的確な判断をするには、少なくとも複数の意見を聴取することが前提になります。

一神話⑪：「英語を習得すれば、グローバル人材としてのパスポートを得たのも同然だ」

以前は「国際化」という言葉が跋扈していましたが、今日ではそれに取って代わって「グローバル化」という言葉を耳にすることが多くなりました。確かに、インターネットによって世界はネットワーク化され、企業活動も国境を超えて地球規模に広がっています。「グローバル化」は、単なる言葉の綾ではなく、世界の現実の姿でもあります。そうした社会において、英語がもっとも重要な言語のひとつであることは、紛れもない事実ですが、「英語さえできれば」と考えるのは、「グローバル化」をあまりに即物的に捉えた見方ではないでしょうか。グローバル・スタンダードという合言葉の基に、すべてが金太郎飴のように均一化することは、世界の多様性を損なう方向に繋がるでしょう。環境における多様性(diversity)の重要性が認識されている現在、自然言語の多様性についても目を向ける必要があります。世界には数千の言語が話されているとされています。もちろん、私たちがこれらの言語のすべてを学ぶことはで

きませんが、少なくとも、英語以外の外国語についても、目を向けるだけの余裕を持ちたいものです。そうすることによって、日・英語という2言語の世界から解放され、さらに広い視野に立つことが可能になるでしょう。

一神話⑫：「英語はコミュニケーションのツールだ」

英語に限らず、「言語とはコミュニケーションのツールである」と、あたかも自明の真実であるかの如く言われることがあります。確かに言語はコミュニケーションの機能を果たすことも事実ですから、このような「言語道具観」には、真実の一端があると言えます。しかし、問題はそれから先にあります。つまり、「言語とはツール以外の何ものでもないのか?」という問が控えているのです。言語は、対人コミュニケーション以外にも、私たちを取り巻いている世界を構造化したり、私たちの心のなかの内的世界を理解可能なものにしたりする際にも、必要不可欠なものです。言語なくしては、そもそも人間理解の糸口を探ることさえ難しいと言ってもよいでしょう。その意味で、英語を学ぶことは、英語話者の世界の構造化の仕方を学ぶことに通じるだけではなく、英語話者の内的世界へと通じる糸口を提供してくれるものでもあります。「言語道具観」で割り切ってしまうには、言語はあまりにも豊かで、謎に満ちた存在です。とりわけ外国語としての英語学習の意味も、「言語道具観」を超えたところにこそ、その奥深い意味が隠されていると思われるのですが、いかがでしょうか。外国語として英語を苦勞して身につける努力は、言語という人類最大の発明について、驚異の感覚(sense of wonder)を抱かせることに通じるかもしれません。

おわりに

以上、英語教育を取り巻くいろいろな「神話」について、思いつくままに取り上げ、私見を述べてきました。英語教育に携わるものとして、私たちが知らず知らずのうちに作り上げてきた神話について、もう一度、冷静かつ批判的に検証していく必要があるのではないのでしょうか。そうすることによって、浮き足立っているように思われる日本の英語教育を、地に足のついたものにするのできるのではないのでしょうか。

特集 私の「英語教育論」

日本の英語教育が抱える3つの二重機能

～高校の場合を中心に～

「MY WAY」シリーズ代表著者

関西外国語大学客員教授 森住 衛

本誌の読者氏の目に触れたかもしれませんが、私は、2013年3月号の『英語教育』の〈英語教育時評〉で、「英語教育の二重機能」と題して時事評論を書きました。その趣旨は、英語教育は3つの点で二重の負担を抱えているので、整理するか覚悟するかかの判断を迫られている、というものでした。本稿は、この〈時評〉で取り上げた内容の詳細版ないしくその2〉です。このいわば〈続編〉を書く理由はいくつかあります。まず、2年前はわずか1ページの紙幅で言い尽くせない部分が多々ありました。今回は約4倍の紙幅をいただいています。また、〈時評〉を書いた時点から2年を経ましたが、私の心配したことは加速されて深刻になったと思います。たとえば、東京オリンピックが決定して妙な形で「英語熱」が高まってきました。さらに、当時の文章は英語教育全体に関してであったために高校に関しての言及が薄いものでした。この問題の余波は高校が最も大きく受けています。本誌の読者諸氏は高校の先生方ですので、この機会に改めて私見を披露させていただきたいと思った次第です。全体として2年前の同じ枠組みで、内容も重なる部分がありますが、二番煎じにはしないつもりです。

学校教育 vs. 社会教育

二重機能の1つ目は、学校教育としての英語教育に社会教育としての英語教育が入り込んできたことです。社会教育としての英語教育とは、一般に、カルチャーセンター・英会話学校・専門学校における英語教育です。TOEICや英検対策もこれに入ります。かつては、学校教育と社会教育は重なりを認めながらもその棲み分けは比較的はっきりしていましたが、最近はこの境界がぼやけてきました。たとえば、英会話は当初から学校の英語教育でも取り上げてきましたが、この30年で割合は急速に大きくなりまし

た。これは中高の文科省検定済教科書や市販の大学の英語教材をみても見れば一目瞭然です。本文に会話や対話が多くなってきています。中学校の教科書は会話体が主流を占めるほどです。前々回の教育課程で高校に登場した「オーラル・コミュニケーションⅠ、Ⅱ」という科目名もこれを裏付けるものでした。今回は「英語コミュニケーションⅠ、Ⅱ、Ⅲ」となり、「リーディング」がなくなったのも「聞く・話す」に傾斜している証左です。そしてその後、文科省から、高校の「英語の授業は英語で行うことを基本とする」方針が出され、一昨年度から実施されています。そして、近年の社会動向もこれに呼応しています。一部企業では社内言語を英語にするという方策が取られています。さらには、2020年の東京オリンピック・パラリンピックのために英会話を強化しようと呼びかけています。

このような動向と連動して、英語以外の授業も英語でという方向がでてきました。高校では、国立大学附属高校などが研究指定校になり、実践されています。大学の一般教養や専門科目の授業を英語で行うケースです。工学や法学の授業を英語で行うのです。この兆候には、日本人だけでは済まないのが、英語の母語話者ないしこれに匹敵する外国人教員を増やすという「おまけ」までついています。たとえば、京都大学では2013年度から5年間で100名の外国人を新規採用して、一般教養課程の授業をAll in Englishにしようとしています。これに対しては、学内でも賛否両論があるらしく、英語で授業をしていたら京都大学ではノーベル賞をとる人が減るだろうという意見も出ているということです。高等教育を母語で行えるのは民族や国の誇りでもあるのですが、この外国人登用の施策には日本が明治時代初期に戻ったような違和感があります。

社会教育の学校教育への参入は、先般、英語教育

再生実行会議が打ち出したTOEFLの大学入試や卒業要件単位への利用にも顕著です。現在、この構想の実施の是非、実施の場合の具体的な方法は、最終の検討に入っていますが、もし実施されるようになれば、高校の授業は確実に影響を受けます。高3の授業の一部は、現在、大学の授業でしばしば行われているように、TOEFLの模擬テストになるかもしれません。このような実質的な問題以前の問題もあります。日本の教育に「借り物」が入ることでの危うさです。大学入試や卒業認定は、本来は、各大学が「自前」で行うべきものです。よしんば統一した全国レベルの試験をやるにしても、自分の国でつくるべきです。それが「独立国」というものです。この点では、大学入試センター試験や英検は当を得ています。この議論は、試験問題の思想性にもかかわってきています。TOEFLやTOEICには、長文や例文によくわかるくもAmericanismが入っています。このようなことが検討されないで今日に至っていると思うのですが、その原因は、この構想のアイデアが経済界からの要請に基づいているからだだと思います。かつての「英語が使える日本人」の育成のための戦略構想および行動計画も経済界からの発議でした。今回の実行本部や実行会議もこの様相を呈しています。

このように学校教育が変化するのは、時代の要請であり、不易流行の「流行」であるとも考えられます。万物流転であり、学校教育も例外ではないという向きもあるでしょう。それにしても、ここまでくると「行き過ぎ」ではないでしょうか。このように思うのは、この変容は功を奏していないとも言えるからです。高校におけるAll in Englishの授業は、昨年の文科省の発表では15%程度の学校しか実施されていません。企業内英語の普及も、一説によりますと、「英語はできるがアイデアの乏しい」役員や従業員が出ています。

学校の英語教育は実用の方に偏り過ぎてしまいました。いたずらに「昔はよかった」というつもりはありませんが、「流行」を追うために「不易」を忘れてしまった感があります。たとえば、高校の英語教育ではかつては文学作品のRetold版が出ていましたが、いまでは激減しています。これは極論になりますが、40年ほど前は、あのH.メルヴィルの大作Moby Dick『白鯨』の一部が2課分連続の計13～14ページの本文で取り上げられていました。今では

夢のまた夢です。それほど現在の高校生の英語力が落ちたのでしょうか。「道案内」も「買い物」の英語もいいのですが、文学、哲学、心理学の題材も必要です。現在は、皮肉にもこの種の英語の文学作品の鑑賞はカルチャーセンターなど社会教育に移っています。もしこのままですと、学校教育としての英語教育の存在価値も危うくなるでしょう。現に、大学の英会話の授業は民間の会話学校に委託することが多くなりました。これは、極言しますと、大学英語教育の空洞化です。

英語教育 vs. 外国語教育

二重機能の2つ目は、英語教育が外国語教育全体の窓口を担っていることです。周知のように、現在は、中・高の英語の正式な教科目名は、「外国語（英語）」です。外国語という教科名で英語の成績が出されています。しかし、〈外国語＝英語〉であっていいというわけではありません。実際、英語以外の外国語を履修できる高校もあります。文科省の報告「高等学校における国際交流等の状況について」（2012年度）では、英語以外の外国語を開講している高校は全国で713校で、14%（7校につき1校）の割合になります。ただ、これを生徒数にすると全国で49,328人で、1.5%（67人に1人の高校生）にしかなりません。このような状況は「先進国」では日本だけと言ってもよいでしょう。「ヨーロッパ言語共同参照枠（CEFR）」に顕著なように、フランス、ドイツ、スペインなど西欧の主な国は、小学校や中学校から複数の外国語を必修にしています。英語圏の国でさえ、英語だけではよくないという言語教育政策が採られています。

隣国の韓国も積極的に英語以外の外国語の履修を奨励・保障しています。すなわち、「中・高では、英語は必修、英語以外の数言語から1言語を選択必修」となっています。この方針は、1997年の第7次教育改革から本格的な実施になっていて、その後、選択必修の外国語の種類は8言語（五十音順で、アラビア語・スペイン語・中国語・ドイツ語・日本語・フランス語・ベトナム語・ロシア語）を揃えるようになりました。現在は、この選択必修の科目には「情報」なども加わるようになり、かつてほどの外国語重視の勢いはなくなりましたが、その外国語教育政策の精神は依然として損なわれていません。韓国の英語教育と言いますと、しばしばTOEICやTOEFLの結果で

日本は大きく差をつけられている点で話題になりますが、私はこの心配よりも、かの国では、英語以外の外国語を学んでいる高校生は約55万人（2012年度）なのに対して、日本の高校生はわずかに約5万人しか学んでいないことの方が格段に深刻だと思えます。この差は異文化理解観や人間観、世界観に大きな影響を及ぼすからです。

さて、本来は欧米や韓国のように複数外国語の履修を保障する制度が必要で、そのための提言や運動が行われていますが、これは一朝一夕には実現しません。そこで、現状では、小・中・高の「英語」が「外国語」の窓口にならなければならないのです。そのために、英語の教師が英語の授業で、英語以外の外国の言語文化に触れることが望まれています。このように言いますと、英語だけでもままならないのに、他の外国語のことなど考えていられないという声が聞こえます。これは大方の実情かもしれませんが、それでも、現在の制度では英語科が外国語教科の代表としてそうせざるを得ません。これが、英語教育が抱えている2番目の二重構造です。

この二重構造をいつまでも続けるわけにはいきません。根本的な解決が必要です。そのためには、上述の韓国の外国語教育政策が参考になります。すでに、いくつかの研究会や学会が動き出しています。筆者が関係している日本語政策学会多言語教育推進研究会（古石篤子代表、森住衛顧問）もその一つです。この研究会は、2014年2月に、「グローバル人材育成のための外国語教育政策に関する提言」を文部科学大臣や中央教育審議会議長など90職・機関に（4月には47都道府県の教育委員会に）提出しました。サブタイトルを「高等学校における複数外国語必修化に向けて」としましたように、高校における複数の外国語の必修化を目指しています。取り上げた英語以外の言語は、五十音順に、アラビア語、韓国・朝鮮語、スペイン語、中国語、ドイツ語、フランス語、ロシア語です。これは、英語を除いた国連公用語の5つの言語に韓国・朝鮮語とドイツ語を加えたものです。この他の言語、たとえば、日本と関係の深いブラジル・ポルトガル語、タガログ語、あるいは、近年関係が深くなっている東南アジア諸国連合（ASEAN）諸国の言語などは重要な候補ですが、今回は第一段階として上記の7言語に止まりました。また、高校段階と特定しましたが、当然ながら、高

校だけでよいというわけではなく、将来的には、幼・小・中・高・大のすべての児童、生徒、学生に複数言語の学習を保障したいと考えています。内容は、〈英語以外の言語の2言語〉の履修もあり得ますが、〈英語必修+1言語の選択必修〉が現実的な状況と言えます。

この提言には上記の7言語の学習指導要領もついています。とりあえず、「第2の外国語」学習指導案と銘打ってありますが、これまでの学習指導要領と異なるところは、目的を以下のように設定していることです。

複数の外国語の学習を通じて、自他の言語や文化に対する複眼的な理解を深め、文化的多様性に対する寛容な精神と、複数の価値観が出会う場所での思考や行動の基盤を育成しつつ、学習した言語による聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う。

この設定は、少なくとも、外国語教育哲学あるいは理念を明確に打ち出している点で、今後、現行の学習指導要領（外国語）を考える上で参考になると思います。

EFL vs. EIAL

3つ目は、EFL（外国語としての英語）とEIAL（国際補助語としての英語）の二重機能です。日本の英語教育は長い間EFLを教えてきて、いわゆる標準英語を扱ってれば無難でした。ところが、30年ほど前から非英語母語話者が英語母語話者を上回るようになり、Englishesの時代に入りました。D. Crystalは*Newsweek*（2005.3.7）で、There could be a tri-English world, one in which you could speak a local English - based dialect at home, a national variety at work or school, and international standard English to talk to foreigners. と述べています。日本や中国の英語教育はこの3番目に入りますが、international standard English（国際標準英語）は、英語母語話者（NS）の英語の規範だけでは済まなくなっています。たとえば、日本人がインド人やシンガポール人と話す場合などです。前者の場合は、インド英語のrの巻き舌の発音を聞くことを避けては通れません。後者では、シンガポールの大衆層の人たちの英語では、This is a pen /a. やI love you /a. などは日常茶飯事です。また、最近では、英語圏

の人たちが、中国人やインド人とビジネスを行う場合、Chinese EnglishやIndian Englishを習っているという、まさに、逆転の発想が出てきています。このような例は、「言語は、これを使う民族の思考法や発想を反映する、だから、英語も変わってくる、そして、コミュニケーションのために、その変容した英語に合わせている」という「理念」と「現実」が合致した珍しい例です。この理念と現実とに普通の英語教育がいかに対応するかが大きな課題です。

このためには、高校段階のどこかの時点で、国際補助語としての英語について説明したり、実際の例を出したりしなければならぬのですが、ここでは紙幅の都合で、EIALの扱いで最も基本的なこと2つにだけ触れておきます。1つは、英語非母語話者（NNS）の英語への価値判断です。たとえば、2006年度版のある「英語Ⅱ」の教科書でEnglishesの題材を取り上げた課の最後の部分が、However, when you have a chance to speak English with someone, don't worry if your English is not always "correct" or "perfect". となっています。これは、学習者が英語を臆せず使うという激励のつもりでしょうが、「NNSが使う英語は'not correct', 'not perfect'」という前提が見え隠れしています。つまり、EIALは正しくない、不完全である、ということが伝わるのです。もう1つは英語が国際補助語になった要因です。同じく、2004年度版のある「リーディング」の教科書では、なぜ英語が国際補助語になったかを5つの理由をあげて説明しています。その5番目は、Languages rise and fall in world status for many kinds of reasons — political, economic, social, religious, literary — but linguistic reasons do not rank highly among them. であり、英語の「言語的特質」でないと喝破しています。まさにその通りです。

なお、筆者が関係しました*Exceed English Reading*（2008）の第5課'Englishes'でも、国際補助語としての英語を取り上げています。その中で最後のセクションでは日本人が使うEIALの1つの立場として、Values are different from nation to nation. When we put into our values into English, we may need to change some English logic. と述べて、その例として、日本語の「何もありませんが／粗茶ですが、どうぞ。」に対して、There is nothing, but please help yourself. / This isn't very delicious, but please

help yourself. を出しました。これは、日本人の遠慮の美学を表した修辭的な表現です。これまでは、このような直訳は英語のlogicにはないので、This is very dilicious, but などのように言い換えていました。しかし、Englishesでは日本語のlogicが英語表現として使われる可能性が出てきました。「国際補助語としての英語」という「器」には、これを使うどの国民や民族の「魂」も入って然るべきだからです。

このように、Englishesの扱いは、最終的には、「正しい」英語とは何か、英語を使う人たちの個性（アイデンティティー）や存在価値（レーゾンデートル）はどうなるかなどの言語社会学的な問題やことばに対する信条や判断の問題になります。このあるべき捉え方や信条を生徒に伝えておかないと、かれらが今後海外に出てEnglishesが使われている実態に遭遇したときに、日本の教室で習った英語とのあまりの違いに当惑をするだけでなく、劣等感を抱いたり、逆に優越感を抱いたりします。このような事態に陥るのを避けるために、日本の英語教育は、EFLに加えてEIALにも触れておかなければいけないという二重機能を負っています。

以上、英語教育が抱えている3つの二重機能の問題を取り上げましたが、最後にそれぞれに一言二言を加えて本稿を閉じます。〈学校教育 vs. 社会教育〉では、学校教育の理念である人格形成と恒久平和を改めて確認したいと思います。また、学校英語教育はそろそろ「すぐに役に立つ」という呪縛から解放されて、「ためになる」ということを堂々と標榜してよいでしょう。〈英語教育 vs. 外国語教育〉で取り上げた複数言語選択必修の実現は、極言しますと、日本人の島国性を打破することにつながります。この島国性は弥生時代末期から現在までに培われたので、是正には本来は同じ年月がかかるのですが、最近のICTの進歩の速さで対応していけば、大巾に短縮できるはずで。最後の、〈EFL vs. EIAL〉ですが、英語が大言語であるだけに、ややもすると英語教育は「エリート」のためにという意味合いを伴ってきました。Englishesの問題は、これとは逆に、それぞれの使い手の土着性や民衆性を保障するという立場です。Englishesを正に認めることは、この大衆性に味方することで、社会言語学的に非常に意義あることになります。

グローバル化と英語教育

[MSTA] シリーズ代表著者
 昭和女子大学 金子 朝子

はじめに

世界のグローバル化は急激に進み、ビジネスでもプライベートでも、実際の場面で使える確かな英語力が必要とされている。しかし、自分は一生英語に関わることはないから英語を勉強する必要はないと考える人もいるかもしれない。確かに、日本がグローバル化しようが、インターネットで世界中の人々との意見交換が瞬時に行われようが、全く関係ない世界にいる大人もいることだろう。しかし、これから社会に出て活躍することが期待されている若者は違う。中学生、高校生が成長していく過程で、自分の活躍の場をどう広げていくかは、個人の問題に留まらず、日本の国全体にとっても重大な問題ではないだろうか。

英語が世界共通語となっていることは間違いのない事実で、世界とのコミュニケーションのためには英語が必要だ。英語と限らず好きな言語を学べば良い、という考えも最もではあるが、中学生や高校生の時代に、将来自分にとってどの言語が必要になるかが見えている人はどの位いるだろう。それならひとまず英語を勉強しておくことが得策だ。また、英語を勉強するよりも国語や日本の歴史・文化をしっかり学ぶことが先決だという意見もある。国語や歴史の勉強をする時間がないほど英語を勉強している若者はどれほどいるのか。より実践的な英語力を身につけるためにはどうすれば良いかを考えることで初めて、日本人としてのアイデンティティの重要性

が認識されるようになった。どちらが先かではなく、両方の力を並行して高めていくことが必要なのではないだろうか。

こうしたことを前提として、本稿ではグローバル化を視野に入れた小・中・高を通しての英語教育についての私見を述べてみたい。

生涯教育の基礎として

小学校では平成23年度から新学習指導要領が全面実施され、第5・6学年で年間35単位時間の「外国語活動」が必修化された。また、平成32年度には「外国語活動」として現在5年生から実施している英語活動を3年生に前倒し、5、6年生は教科に格上げして検定教科書を使用し、成績評価も導入して、週3回程度指導することが発表されている。中学校では平成24年度から、高等学校では平成25年度の入学生から現在の学習指導要領に移行となった。小学校5年の「外国語活動」に始まって、中学校、高等学校と一貫して新学習指導要領に基づいた外国語（英語）指導を受けた生徒が高等学校を卒業するのは、東京オリンピックの1年前、平成31年3月となる。

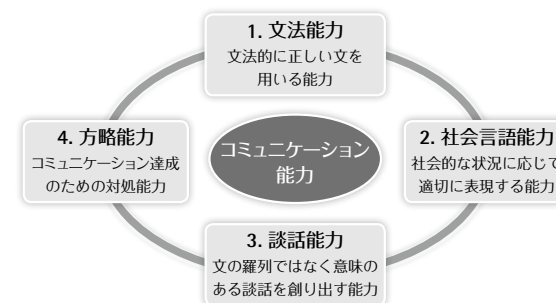
下表には、学習指導要領に示されている外国語（英語）の目標を一覧にした。比較のために相違している部分には下線を施した。

どの目標も「言語や文化の理解」を通して「積極的にコミュニケーションを図る態度」を育て「コミュニケーション能力の育成」を行うことをその柱としている。コミュニケーション能力とは、単にこ

外国語科の目標

小学校	中学校	高等学校
外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。	外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う。	外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりするコミュニケーション能力を養う。

とばのやり取りだけを指すものではない。Canale & Swain(1980)によれば、以下の1～4のすべてがコミュニケーション能力の要素として含まれている。



小学校、中学校、高等学校で学ぶ英語は、大学生、社会人となって、それぞれの目的に応じて英語と関わる時に、その基礎力を保証できるものであってほしい。学習指導要領によれば、高校までで3,000の語彙といわゆる学校文法を身につけ、社会言語能力、談話能力、方略能力も含めたコミュニケーション能力を育成することで、その後の英語との関わりの地固めを行なうことになる。そのためには、学習指導要領に示された文法の知識とその運用力は最低限必要だ。もちろん、日常生活で常に英語が使用されることのない日本では、このためにかなりの時間が必要だが、だからと言って、コミュニケーションを教えるか文法を教えるかという議論は全く成り立たない。文法能力はコミュニケーション能力を構成する重要な要素のひとつであるからだ。

「人間にとって必要なのは、異文化、異人種との壁を超えて理解しあえる人類愛とその基礎のコミュニケーション力、それを可能にする道具としての英語コミュニケーション力である」、とは元国際教養大学理事長の故中嶋峰雄氏の言葉だ。日本語を母語としない人々も日本で仕事をし、生活している。国際共通語である英語を介して異なる文化的背景を持つ人と交流しながら、共にこれからの世界を創造していく力は、一部のリーダーにだけでなく、より一般的に求められるようになってきている。こうした時代に活躍する若者たちの生涯の英語との関わりの基礎として、小・中・高の英語教育には大きな期待がかけられている。

英語のコミュニケーション能力を培うために

それならば、英語のコミュニケーション力を養うために有効な方法には何があるだろう。それは、具

体的な学習行動に結びつく学習動機を生徒自身が持つことができるような、「成功体験」であると考えている。

最近は簡単に翻訳ができるインターネットのサイトが増えている。なぜ機械が瞬時に翻訳できるのかというと、学習辞典の何百倍ものデータがそこに取り込まれているからで、必要な情報はすぐに取り出せるようになっているからだ。人がことばを使う場合は、伝えたい内容を表す言語データが必要となる。だから、英語力を高めるためには、伝える中身と英語のインプットを溜め込んでおかなければならない。英語は、私たちの日常生活の中にかなりたくさん入り込んでいて、例えば、ほとんどのカレンダーには、英語表記もある。それなのに、テストではJanuaryの綴りが正確に書けない。コンピューターならばすべてのインプットが情報として取り込まれるが、人の場合は、ある情報を取り入れるか、取り入れないかの選択は、英語を学ぼうとする動機があるかどうかによって任されているからだ。予備校の英語授業風景をYouTubeで見ると驚いた。英語活動などは全くない。大学受験に照準を合わせた受講者たちは、その授業から多くを学び満足している。反転授業、アクティブ・ラーニング、e-ラーニングと、あの手、この手で生徒たちの学習動機を高める苦労はいらぬ。ところが授業では、生徒たちにどのようにして英語学習への動機付けをするかの工夫が必要だ。

今回の学習指導要領（高等学校）で特に強調されたことが二つある。まずは、英語で授業を行うことを基本とする点で、次の改訂では小学校で教科としての英語が始まることを踏まえて、中学校でも英語で授業を行うこととなるであろう。ことばの学習には気が遠くなるほどの長い時間がかかる。中学校、高等学校の6年間をかけても、おおよそ1000時間程度しかない英語の授業だけでは到底足りるはずがない。小学校から徐々に英語を使うことに慣れていく過程を経ても、授業時に初出事項の全てを英語で指導し、生徒が高い動機を保つためには、教師側からの仕掛けが必要だ。例えば、文法訳読式の授業を、英語を通して行うことは難しく、授業活動の形態は自然に変わっていく。英語のコミュニケーションを通して指導や活動ができる授業を行うためには、これまで授業中に行っていた語彙学習、和訳、文法解説など、生徒の個人差によって必要な時間が違う学

習活動は、授業外で自主的に積み重ねてもらう必要がある。こうした準備があってこそ、総合的なコミュニケーション活動を十分に行う時間を授業中に確保することが可能となる。自主的学習を促すような動機付けがこれまで以上に重要となる。

二つ目は4技能の統合である。聞いたものを書く、読んだものを話すなど、いくつかのスキルを組み合わせる用いる活動の展開である。例えば、日本語以外を母語とする地域に住む外国人に英語でインタビューを行い、紹介記事を壁新聞にし、後に学校に招待して、自国の文化などについて英語で話してもらうなど、日常生活の場で英語によるコミュニケーションが必要となる場面を考慮して、社会との接点を持つ活動が考えられる。

英語による授業でも、統合的なコミュニケーション活動でも、生徒の学習動機を高めるために有効なのは、「成功体験」であると思う。つまり自己効力感を持たせることが鍵となる。試験勉強を頑張ったからテストで良い点が取れた、という場合の自己効力感、自分の努力がそのまま点数に表れるのでわかりやすい。しかし、英語で行う授業やコミュニケーション活動で成功体験を得るためには相手が必要となり、一人ではできない。架空ではない相手とのやり取りのあるコミュニケーションで、英語が通じたという成功体験が是非欲しい。もちろん、失敗の無い成功や、逆に、失敗ばかりでは学ぶ意欲は減退する。「成功体験」は即効性がある特効薬にはならないかもしれないが、生徒が積極的に英語を使うことを通してコミュニケーションができたという成功体験は、自己効力感を高める。またチャレンジしてみようと思う「やる気」を引き出すというプラスの循環を作りたいものだ。

これからの英語学習の目的と目標

日本の英語教育は今や世界の潮流から外れたガラパゴス的なものになってしまっていると評されることもある。英語の学習や指導に自信を無くしてしまっているのではないだろうか。それはこれまで、英語を学ぶことが生徒それぞれの将来にどう役立つのかが明確でなく、社会と結びついた目的が見つからなかったからだ。未だに多くの中学生や高校生が、受験のためだけに英語を勉強している。だから、合格すればそれで英語の学習は終わってしまう。しか

しこれからは、日本のグローバル化を推進する力となるコミュニケーション力を身につけることに目的を置くべきだ。ちなみに韓国では、国力の成長に寄与できる言語的基礎を身につけることを、中国では英語を話して日欧米に打ち勝ち、経済エリートになることを目指しているのに比べれば、まだまだグローバル化のためにという目的では生温いのかもれない。

さて、その目的を達成するための段階的な到達度目標として、語学のコミュニケーション能力を示す国際標準規格であるCEFR (Common European Framework of Reference for Languages) が欧米やアジアでも幅広く導入されつつある。その具体的な学習到達度の目標はCan-Do Listとして設定される。これは英語母語話者の英語を100点として、学習者の英語が何点であるかを示すものではなく、絶対的な言語運用力そのものがどのレベルにあるのかを示す目標である。個々の生徒が、英語を学び始めた時から小・中・高へ、そしてさらにその次の段階へと進んでいく間、CEFRの基準に照らして自分の外国語レベルを常に意識しながら学ぶことができる。

右上はCEFRに基づいたCan-Do Listの例を示している。

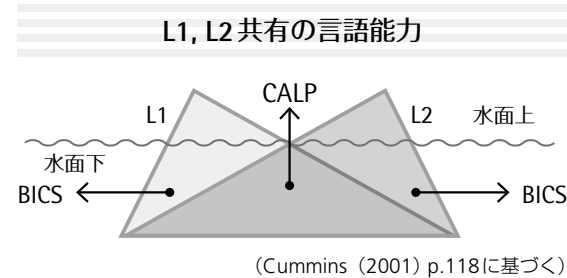
このCan-Do Listは単に単語や文法の知識を挙げたものではなく、それを目的に応じて使うことができる運用力を示している。文部科学省は「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」の中で、2020年の東京オリンピックを見据えて、中学校では基礎段階の英語使用レベルA1, A2 (英検3級~準2級程度) を、高等学校では自律した言語使用レベルB1, B2 (英検2級~準1級程度) を目指し、逐次改革を推進すると発表している。著者はベルギーのルーベン大学が中心となって収集した、世界11カ国の大学上級生の話しことばコーパスLINDSEIの日本人サブコーパスを担当したが、収集した日本の大学生のエッセイのレベルは最高でもB2であった。すでに中学校や高等学校ではCan-Do Listによって指導目標を設定しているところもあるが、CEFRに基づく上記の目標は、現行の学習指導要領に比べてかなり高いところにある。センター試験も東京オリンピックの次の年2021年度の入試から大きく変わる予定であり、英語では外部試験の活用や、評価にCEFRを利用することも検討されている。英語学習の目標も、

CEFRに基づいたCan-Do Listの例

C 2	ほぼすべての話題を容易に理解し、その内容を論理的に再構成して、ごく細かいニュアンスまで表現できる
C 1	広範で複雑な話題を理解して、目的に合った適切な言葉を使い、論理的な主張や議論を組み立てることができる
B 2	社会生活での幅広い話題について自然に会話ができ、明確かつ詳細に自分の意見を表現できる
B 1	社会生活での身近な話題について理解し、自分の意思とその理由を簡単に説明できる
A 2	日常生活での身近なことがらについて、簡単なやりとりができる
A 1	日常生活での基本的な表現を理解し、ごく簡単なやりとりができる
A 0	ごく簡単な表現を聞きとれて、基本的な語句で自分の名前や気持ちを伝えられる

(NHK, 2015に基づく)

何を知識として持っているかではなく、英語を使ってどんなコミュニケーションが出来るかに変わろうとしている。



Jim Cummins (2001) は、水面に浮かぶ氷を例にとって、母語 (L1) も第二言語 (L2) (外国語でないことに注意) も水面上では別々に見えるように見えるが、水面下では重なった部分があり、そこは共有部分となっていると説明している。その部分を認知的言語能力 (CALP) と呼び、ここにある知識は一つの言語のみに閉じ込められているものではないとしている。一方、重なっていない部分を基礎的対人伝達スキル (BICS) と呼び、L2 が日常的に用いられている環境にいれば、CALP に比べて比較的短い期間で学ばれるとしている。この考えに基づけば、小学校3年生くらいまでに成長する概念理解力は、言語を超えて転移するものなので、L1 とL2 の両方の言語スキルを伸ばすことで、プラスの教育効果をもたらすことが期待される。Cummins の理論を外国語としての英語の学習にそのまま当てはめることには異論があるとしても、重要な示唆を与えてくれるものではないだろうか。コミュニケーション力を伸ばすには、伝える中身が重要だ。中身があれば、英語で何

<参考文献>

Canale, M. and M. Swain (1980). Theoretical Bases of Communicative Approaches to Second Language Teaching and Testing, *Applied Linguistics*. 1(1) pp. 3-47.
 Cummins, J. (2001). *An Introductory Reader to the Writings of Jim Cummins*. Clevedon, Avon: Multilingual Matters.
 NHK「15分でわかる英語力測定テスト2015」2015年3月6日以下のサイトで閲覧 <http://eigoryoku.nhk-book.co.jp/cefr.html>
 文部科学省「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」2015年3月6日以下のサイトで閲覧 http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/_icsFiles/afiedfile/2014/01/31/1343704_01.pdf

と言えば良いかわからない単語や表現があっても、その部分だけは日本語を使っても構わないのではないか。全部英語で正確に言えないからと話すことを拒んだり、書くのを嫌がったりするよりも、ずっと良い。それをきっかけにして、英語の表現を知ろうとする動機付けにもなるし、それで何とかコミュニケーションに成功すれば、これもひとつの成功体験となる。

おわりに

グローバル化する社会の中での自分の役割を理解し、かつ外国語や異文化についての知識や技術を持って活躍することができる人材を育てること、そしてそのために、さまざまな成功経験を生徒に与える機会を作り、具体的な学習行動につながる動機を高めることは、教師の重要な役割である。間違えると恥ずかしいから英語は使いたくない、と思うことがない人材を育てたい。英語を学ぶ者は、母語ができて、その上に英語も使えるのだから、英語しか使えない英語母語話者よりもずっと言語能力が高い。

世界には、様々な言語があることを小学校のうちから体験し、日本人以外の英語を学ぶ人々とも英語を介してコミュニケーションを行う機会も作りたい。こうした機会は、グローバル化社会での英語コミュニケーション力の重要性を身を持って体験してもらえる絶好のチャンスとなる。恐れずにチャレンジして、英語でのコミュニケーションの成功体験を一つでも多く積み重ね、たくさんの日本の若者がグローバル人材として世界に羽ばたいてほしいと願っている。

1 CROWN English Communication I
Lesson 8 Not So Long Ago

良い教材と出会うことの喜び

広島県立安芸南高等学校 金森 智恵子

“Not So Long Ago”という教材に出合ったのは2007年のことで、当時は「英語 I」という1学年対象の授業の中で初めてこの教材を扱いました。

最初にこの教材を目にしたときには、先ずベトナムの少女の写真があまりにも衝撃的に飛び込んできて、どのように教えようかと少し躊躇しました。しかしその後、彼女が戦争の傷を乗り越え、力強く生きて、現在は幸せな家庭を築いているということが紹介されていたので、生徒もただショックを受けるのではなく、彼女の生き方に共感しながら、前向きにこの教材と向き合ってくれました。

「無事」にこのレッスンの本文を終えて、なんとなくほっとした気分になっておりましたら、その間ずっと私の心の中にくすぶっていた思いが、はっきりと疑問の形として浮かび上がってきました。ベトナムの少女の写真はそれ自体が強烈なインパクトを持って迫ってきますが、その前に登場した火葬場の少年の写真の意味は何なのだろうと。生徒たちは広島の子どもなので、これまでに何らかの平和教育を受けてきています。そこで、生徒に「この少年は火を見つめながら、何を思っているのだろうか」と問いましたところ、大半の生徒が、「戦争が憎いと思っている」というような、いかにも戦後の子供にありがちな通り一遍の意見が返ってきました。

私自身、少女の写真があまりにもショッキングなので、指導の際もそちらにばかり気を取られていましたが、それに比べるとインパクトの弱いこの少年の写真については、よく考えて想像力を働かせてみないと、その意味は生徒には伝わらないのではないかと思いました。しばらく写真の少年

と向き合うようにして見ていたら、少年が語りかけてくるように感じたので、それをもとに対話文を作ってみようと思いました。前半を教科書の内容をまとめて写真展の案内とし、後半を写真展鑑賞後の2人の対話という構成にして、この課の終わりに復習として使用しました。少し生徒たちには難しい言葉もあったようですが、最後に短い感想を書いてもらったところ、もう少し自分の身に引き寄せてこの教材を受け止めてくれたことがわかり、私自身もなにか僅かでも使命を果たせたような喜びを感じることができました。

それからはこの科目を担当することはなかったのですが、『CROWN English Communication I』と科目名が変わった今もなお、この奥行きのある題材が姿を消さずにいることにうれしさを感じています。

英語の教師として教材を選ぶとき、いつも悩むのが、教える生徒の現在の力にふさわしいという点を最重要視すべきか、少し難しいかもしれないが内容の深いものを与えるべきか、という点です。担当する個々の生徒の英語の力や英語への興味の度合いには大きな差があり、教える際にも常にどのレベルに焦点をあてるかということに悩みますが、教えてみて感じることは、たとえ多少難しくても、結局面白い教材、深みのある教材は、学んだ後、どの生徒も満足するということです。生徒にとって学び応えのある教材をこれからも供給して下さるよう期待しております。

最後に稚拙ではありますが、私が作りました対話文と練習問題を紹介いたします。いくらかでも参考にしていただければ幸いです。

教材資料

対話文

Sota : There are so many photos in this exhibition. biting his lip so hard? It seems to me that he was trying to endure the fear and the loneliness of being left alone. He might be trying to tolerate other negative feelings welling up inside him : grief, anger...and maybe a sense of guilty.

Yoko : Yes, I hear there are about three hundred photos here. They show us the twentieth century was not only an age of progress, but an age of war.

Sota : What picture impressed you the most?

Yoko : The picture of the Berlin Wall. It looked like a symbol of the cold war. How about you?

Sota : Do you remember the picture of a boy carrying a baby on his back?

Yoko : Yes, I remember it. I really feel sorry for the boy. I saw you standing in front of the picture for a while. What were you thinking?

Sota : Well, I was wondering why the boy was all alone. Why did he bring the dead baby to this cremation ground all by himself? What happened to his family?

Yoko : This photo was taken in Nagasaki just after the war, so maybe they were all dead because of the bomb.

Sota : Was there any place for him to go back to? I'm afraid he had nobody to take care of him.

Yoko : What makes you think so?

Sota : Well, do you remember the look of him?

Yoko : Yes. His face was hard.

Sota : The photojournalist who took this picture says that the boy was biting his lower lip so hard that it shone with blood. Why was he

Yoko : A sense of guilty?

Sota : Maybe he thought the death of the baby was his fault. A little child would cry in this situation, but I guess he couldn't afford to cry like a little child because he knew he would have to live alone.

Yoko : War is terrible especially for children. What would you do if he were your own brother?

Sota : I could do nothing but watch the flames together with him.

Yoko : I would like to hold him by the hand and share his pain. I hope he survived the hard time after the war and he is having a happy life now.

Sota : If he is still alive, he is as old as my grandfather. My grandfather has never talked about the wartime. I'll tell him about this exhibition and ask him what he went through.

Yoko : I'd like to listen to his story. Do you mind if I go with you?

Sota : Not at all. Why don't we visit him next Sunday?

練習問題

① Ladies and gentlemen, welcome to our exhibition “Looking Back at the Twentieth Century.” We have collected about three hundred photographs here. They will show you something of the history of the past century.

Photographs tell us a lot. They show us what happened in the past. They sometimes show us things we may not wish to see.

The twentieth century was a century of war. There were two world wars, and a cold war, and smaller wars all over the world. A Japanese journalist

even called the twentieth century “thirty-six thousand days of suffering.” It is perhaps difficult to find any sign of hope in the photos here, but we can if we try.

There should never be war again. This is the message we would like the photographs of this exhibition to bring to you today. I would like to leave you with the thought that all this happened *not so long ago*.

Thank you.

② **Sota** : There are so many photos in this exhibition.
Yoko : Yes, I hear there are about three hundred photos here. They show us the twentieth century was not only an age of progress, but an age of war.
Sota : [A]
Yoko : The picture of the Berlin Wall. It looked like a symbol of the cold war. How about you?
Sota : Do you remember the picture of a boy carrying a baby on his back?
Yoko : Yes, I remember it. I really feel sorry for the boy. I saw you standing in front of the picture for a while. [B]
Sota : Well, I was wondering why the boy was all alone. Why did he bring the dead baby to this cremation ground all by himself?
[C]
Yoko : This photo was taken in Nagasaki just after the war, so maybe they were all dead because of the bomb.
Sota : Was there any place for him to go back to?
I'm afraid he had nobody to take care of him.
Yoko : [D]
Sota : Well, do you remember the look of him?
Yoko : Yes. His face was hard.
Sota : The photojournalist who took this picture says that the boy was biting his lower lip so hard that it shone with blood. [E]
It seems to me that he was trying to endure the fear and the loneliness of being left alone. He might be trying to tolerate other negative feelings welling up inside him : grief, anger...and maybe a sense of guilty.
Yoko : A sense of guilty?
Sota : Maybe he thought the death of the baby was his fault. A little child would cry in this situation, but I guess he couldn't afford to cry like a little child because he knew he would have to live alone.
Yoko : War is terrible especially for children.
[F]
Sota : I could do nothing but watch the flames together with him.
Yoko : I would like to hold him by the hand and share his pain. I hope he survived the hard time after the war and he is having a happy life now.
Sota : If he is still alive, he is as old as my grandfather. My grandfather has never talked about the wartime. I'll tell him about this exhibition and ask him what he went through.
Yoko : I'd like to listen to his story. Do you mind if I go with you?
Sota : Not at all. [G]

① 次の問に対する答えを本文中の語句(または文)をそのまま抜いて示しなさい。

- 1) What is the title of this exhibition?
- 2) What did a Japanese journalist call the twentieth century?
- 3) They have two messages they want to send to us through this exhibition. What are they?

② 対話文が自然な流れになるように [A]～[G]に次から適当なものを選んで入れなさい。

- あ : What happened to his family?
 い : What makes you think so?
 う : What were you thinking?
 え : What would you do if he were your own brother?
 お : Why don't we visit him next Sunday?
 か : What picture impressed you the most?
 き : Why was he biting his lip so hard?

2 MY WAY English Communication I Lesson 7 The Power of Words

Oral Introductionから始まる 生徒の意欲的な活動を促す英語の授業

埼玉県立深谷第一高等学校 嶋田 容子

はじめに

私は、現任教への異動を機に、授業スタイルを変えて英語で授業を行うことを決意しました。しかし、そもそも「英語で授業」とはどのようなことなのかよくわからず、All Englishでなければならないという窮屈な考えに縛られていた時期もありました。その結果、私自身が英語でまくしたてるような授業になってしまい、反省したこともあります。また、文法に関しては、説明や知識を整理するには日本語の方がはるかにわかりやすく、効率的な場面も多く、そのような場面での英語による説明は、生徒をさらに混乱させかねないと思いました。このように、英語で授業をするにあたり、授業の中でどのように英語を使用するのか、どのような授業構成にしたらよいのか悩み、試行錯誤の毎日でした。しかし、次第に自分なりの授業スタイルが確立できたように思います。

1 英語で授業を行う3つのポイント

私が、主に日本語で行ってきた授業から英語で行う授業に変えた方法のポイントは、「Classroom English」「Oral Introduction」「Interaction」です。英語で授業を行うことを意識してからは、input中心の授業から、自然とoutputのための活動時間が増えていきました。

まず、私が最初に徹底させたことは、Classroom Englishです。あいさつから英語で始め、指示を出す時や評価を行う時は英語です。これらの表現は、毎回授業で使い続けて習慣化することで、生徒も

すぐに慣れていきます。Classroom Englishに関しては、1年生の4月から徹底させるとよいと思います。2, 3か月経つ頃には、生徒も英語での指示に慣れて動けるようになりました。具体的なOral Introductionについては、以下の「2 Lesson 7におけるOral Introduction」で示します。また、Interactionについては、「3 Oral Introduction後の授業展開」「4 グループ学習について」で示します。

2 Lesson 7におけるOral Introductionの実践例

(1) Oral Introductionのねらいと方法

私は、Oral Introductionを充実させることは、英語による授業の大事な要素だと考えています。私は、各レッスンやセクションごとにプロジェクターを使って行うのですが、毎回構成を考える時には、指導書の「解説と指導編」と「英語で授業編」を参考にしています。さらに、本文に関連する写真や地図を用いて、写真から読み取れるプラスαの情報も話題にしながら、広がりのあるストーリーを展開していきます。スライドを見せながら、一人一人の生徒にQ&A形式で質問を投げかけます。答え方のわからない生徒には、別の表現で言い換える、2択の質問に変える、ジェスチャーを使うなどして、英語で対話ができるように工夫します。また、新出単語を、写真や絵と英語での説明で意味を推測させる活動を行います。この時にも、指導書の「英語で授業編」や英英辞典がたいへん役立ちます。生徒はこのやり取りが

とても好きなようで、熱心に見て聞いて英語を発しています。教師の一方通行にならないように、生徒に英語で質問を投げかけ、重要な単語やフレーズなどは、英語で言わせることで、生徒とのやりとりにリズム感が生まれます。

Lesson 7のOral Introductionで使用したスライドは20枚、今回は、レッスン全体の導入として行ったため、所用時間は25分でした。各セクションの導入として行う時は、長くて10分以内に収まるようにしています。各セクションやレッスンを読む前にこうした活動を取り入れることで、教科書の本文を読む時に英文の内容をイメージしやすくなり、各セクションを学習していく上でのモチベーションアップにもつながります。また、既習レッスンの教材も生かすことができます。そして、Oral Introductionの後には、簡単なワークシートを用意して取り組ませて、内容を整理させます。

(2) 単元の概略

Lesson 7は、オバマ大統領のブラハでの「核兵器なき世界へ」の演説 → ノーベル平和賞受賞 (Section 1) → オバマ氏の生い立ちと大統領になるまでの道程 (Section 2) → 核兵器廃絶の難しさとおバマ氏による現実の一部容認 (Section 3) → オバマ氏のことばに触発された三宅一生氏 (Section 4) という概要です。このレッスンの中には、オバマ大統領、ブラハでの演説、ノーベル賞、オバマ氏の歴史、核兵器、広島・長崎原爆投下、三宅一生氏など、様々なキーワードがあります。生徒の興味・関心を高めるために、このレッスンに入る前にこれらのキーワードを基にOral Introductionを作りました。写真は教科書に載っている写真と、自分で探した画像を使用しました。

(3) オバマ大統領について

まずは、オバマ大統領が聴衆の前で手を振り、ミシェル夫人と一緒に写っている写真のスライドから始めます。“Who is he? What is his famous phrase? Who is the lady next to him? What’s

his job?”など、生徒を指名しながら簡単な質問をしていきます。例えば“She is Obama’s wife.”と答えられない生徒に対しては、“Is she Obama’s daughter, mother or wife?”と質問を変えます。その後“President of what country?”という具合に、さらに質問をテンポよく続けます。そして、この写真で新出単語“audience”を紹介し、絵を指さしながら、“There are many people around them. Who are they? What are they doing?”という問いから“audience”という単語の意味を推測させ、日本語を介さずに紹介します。繰り返し出てくる単語や重要度の高い単語に関しては、このような方法で紹介しています。キーワードが写真の上に浮かび上がるようにスライドを作成し、クラス全体でリピートさせて印象に残るようにしていきます。

“He is the president of America.”という答えが引き出せたところで、次は“America”についてです。Lesson 7だけでなく後に学習するLesson 9においても、アメリカが色々な表記で出てくるので、ここでAmerica = The United States of Americaであることを教えます。“What does state mean?”と質問をしても生徒は答えがわからないので、“There are 47 prefectures in Japan. There are 50 states in America.”とヒントを与えていくと、生徒は“state = 州”であることに気がきます。ここからアメリカの地図を見せて、“Where was he born?”と聞いていきます。“Hawaii”という答えを導き出すために、“It’s an island that is very popular with Japanese tourists. Can you guess where it is?”とヒントを出します。テンポよく進めるために、適宜生徒が理解できる表現に言い換え、ヒントを与えることが大切です。

次に“Barack Hussein Obama”と名前を見せて、“What is his given name?”と聞きます。姓と名に関してはLesson 1で扱っているので、復習にもなる質問です。次に“Barack is a Swahili word. Swahili is an African language.”という情報を与え、次のスライド (オバマの父母の写真) へとつな

げます。

オバマ氏の名がスワヒリ語であるということ、彼の父の写真から、父がケニア出身であることを推測させます。この時も地図を見せながら“The capital of the country is Nairobi. Many marathon runners are from this country. Takahashi Naoko competed with many runners from this country.”と、Lesson 2で学んだ内容もヒントとして使います。そして年表で、オバマ氏の生い立ちと大統領になるまでの道程を、Q&A形式で進めていきます。

(4) 核と平和について

そして、核の話に移ります。オバマ氏が聴衆に囲まれて演説を行っている写真を見せ、まずは最初のスライドで学んだ“audience”の復習です。このように、一度出てきた単語を別のスライドで登場させることも、一つの工夫です。そして、この演説のキーワードとなる“a world without nuclear weapons”という言葉を紹介しますが、nuclear weapon”という単語も、写真と英語での説明で理解させます。“Nuclear weapons have been used only twice in the history in the ending days of World War II.”と説明し、広島・長崎の写真を見せます。この時点で、生徒は今何を話題にしているのかわかるので、“Which country dropped nuclear weapon?” “When were nuclear weapons dropped?”と質問を続けます。そして、広島と長崎に落とされた原爆と、現在、世界にある核兵器の数・威力について想像させます。そしてブラハの演説の写真に戻り、なぜオバマ氏が「核兵器のない世界を実現させるつもりだ」と宣言したのかを考えさせます。

そして最後に、この演説が彼を有名にし、ノーベル平和賞を受賞したことについて触れます。Lesson 6で既習の単語“prize”を使い、“He got the prize after the speech.”と説明し、マラユスフザイ、マザーテレサ、アウンサンスーチー (Lesson 1で登場) など、他のノーベル平和賞受賞

者の写真を何枚か見せて、オバマ氏がノーベル平和賞を受賞したことを紹介します。以上のような流れで、Lesson 7の導入としてOral Introductionを行いました。(Section 4の導入としては別の活動を考えていたので、あえてSection 4の内容には、ここでのOral Introductionでは深く触れませんでした。)

3 Oral Introduction後の授業展開

このように、何を使ってどのようにOral Introductionを展開していくのかを考えて、準備することは時間のかかる作業です。しかし、教科書の題材について調べ学び、生徒にわかるような英語にパラフレーズすることは、教師にとってもたいへん勉強になることですし、私は楽しみながら教材研究を行っています。そして、教師自身が英語を使うことも大切ですが、何よりも大切なことは、生徒に英語を使わせるということです。

そして、Oral Introduction後は、各セクションの指導です。①新出語句・文法の確認、練習 ②本文の概要を掴む練習 (Q&A、T or F、本文内容を図表にまとめさせる、対話を完成させる等) ③Oral Introductionで扱わなかった部分 (内容・言語材料) について日本語での補足説明 ④本文の音読 ⑤リプロダクション ⑥サマリー という流れで進めます。Oral Introductionから得られた情報は、ここでの生徒が自力で教科書の本文を読む活動 (Q&A、T or F、本文内容を図表にまとめさせる、対話を完成させる等) につながります。④では、全体・ペア・個人で多様な音読を行いますが、音読させる前には、十分に聞かせて音声と文字を一致させます。また、① ② ③で英文の内容を理解させた上で行っていきます。そうでないと、ただ読んでいるだけという状態になり、音読の目的が果たせませんし、その後の活動にもつながりません。また、音読指導には様々な方法がありますが、それぞれの音読の目的を知り、適切な順序とタイミングで取り入れるようにしています。そ

して最後には、各セクションのまとめとして、キーワードや写真をヒントにサマリーを言う活動(ペア) → 書く活動(個人)を行います。音読とリプロダクションの活動をしっかり行った後であれば、生徒は本文の内容をまとめて相手に伝えることができます。英語で授業をするには、このような生徒同士のInteractionも大切です。生徒にとって、生徒同士であれば英語を使いやすく、生徒全員が一斉に英語を使い話すことになるので、絶対的な発話量を確保することができます。

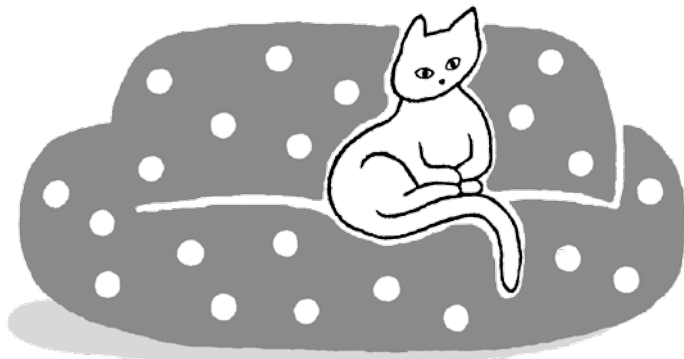
4 グループ学習について

そして、前述したSection 4の導入としての活動を紹介したいと思います。このセクションでは、オバマ氏のことばに触発された三宅一先生が登場します。その導入として、グループ学習を行いました。彼がニューヨークタイムズに寄稿したエッセイと、教科書本文をアレンジした3つのパッセージ(A・B・C)を作成し、使用しました。Aは三宅氏について、Bは三宅氏の戦時体験、Cは三宅氏の願い という内容の英文です。3人1組になり、A・B・Cのいずれかの英文を読み、英問英答や穴埋め問題に答えながらサマリーを作ります。その後、A・B・C一人ずつを寄せ集めた新たなグループを作り、お互いに得た情報を紹介し合い、共有

します。そして最後に、「三宅氏になったつもりで、オバマ大統領に想いを伝える手紙を書く」という活動を行いました。この活動を行うことで、三宅一先生について知り、オバマ大統領の言葉が人々の心を動かす力があつたことを確認し、「核なき世界」実現への道程は決して平坦ではない、と改めて感じる事ができたようです。手紙を書く時には、Section 1～3で読んだ内容や単語・表現を使って、うまくまとめて書くことができていました。サマリーの作成や、このようなグループワークでの活動を行う時は、生徒がうまく言えているか、困っていることはないかを教師がモニターすることが重要です。生徒に英語を使わせっぱなしにするのではなく、フォローするために、全体の前で発表させたり、書いたものを回収して添削したりします。

おわりに

このように、Oral Introductionで生徒の心をつかみ、授業の中で生徒が主体的に英語を使う場面を設定することは、生徒の英語学習に対する関心・意欲が高まり、前向きな学習につながると実感しています。今後も、生徒が積極的に英語を学び、活用する能力を高められるように、指導法の工夫・改善に努めていきたいと思っています。



目標はやはり「使える英語」!

青森県立八戸工業高等学校 志村 康秀

1 指導の際に心がけていること

- (1) 教室の整頓や身だしなみ、元気な挨拶かなど、授業に向かう生活指導の充実を基本とする。
- (2) 授業を全て英語で成立させるのが難しい場合は、「アクティビティ中は日本語禁止」などルールを決めて、一定時間は英語で通せるよう確保する。

- (3) 文法説明はなるべく簡潔にし、身近な話題で英文を作ることで文法・構文の定着を図る。
- (4) 定着を確認するために、「小テスト」「まとめのテスト」をこまめに行い、授業の中で導入から復習まで、ある程度完結させる。
- (5) 「小テスト」に始まり、音読、起立しての「ペアワーク」、生徒の「デモンストレーション」などを取り入れ、眠る暇の無い授業作りをする。

2 自作ワークシートを用いた授業での発話例 (発問は指導書より引用)

Lesson 6 Unique Countries

(Worksheetより抜粋)

SECTION 3

Mike: Aya, what's the smallest continent in the world?

Aya: I think Iceland is.

Mike: Iceland isn't a continent. It's an island.

Aya: How about Greenland?

Mike: Greenland is also an island. On this map, it seems that Australia is the smallest continent.

Aya: Well, let's check again on the Internet.

Mike: I'm right! And Australia is the only continent that has just one country.

[T-F Questions]

1 Iceland is the smallest continent in the world. ()

2 Australia is both a continent and a nation. ()

[Q & A]

1 Is Iceland a continent?

2 What's the smallest continent in the world?

SECTION 3 for Pair Work

Mike: Aya, what's the () () in the world?

Aya: I think Iceland is.

Mike: Iceland isn't a continent. It's an ().

Aya: () () Greenland?

Mike: Greenland is () an island. On this map, () () Australia is the smallest continent.

Aya: Well, let's () again on the Internet.

Mike: I'm right! And Australia is the only continent that has just one country.

(和訳付き: 省略)

授業研究
3

(1) 挨拶発話例

Teacher : Let's begin! Let's start! Stand up, please.
(以下T) Hello, everyone! How are you today?
 Do you like this sunny / rainy / dry / cold weather?
 How was your weekend? Did you enjoy your holiday?
Students : I am good / very good / great / super.
(以下Ss) It was good / nice / wonderful. Yes, I did.

挨拶は、何種類かバリエーションを付けて行い、返答も一律同じでなくて良いことにしている。It was bad., I'm tired. など答えやすいが、ネガティブな言い回しは挨拶には極力使わないように指導している。

(2) 導入発話例

T : Please look at your handout. Let's read section 3 in chorus.
 Open your workbook and turn to page 45.
 Are you ready?
Ss : Yes. / Sure. / All right. (Not yet.)
T : Which page are you looking at? Page
Ss : 45!
T : Okay, repeat after me.

教材CDを使用して、リスニング、単語、スラッシュリーディング、フルセンテンス読みをした後、慣れてきたらRead and Look up、事後にはペアでワークシートを用いて練習する。次時に、本文の「穴埋め小テスト」を実施する。教材のどこをやっているか分からない生徒もいるので、机間巡視や質問をしながら、場所を確認する。回を重ねたらシャドーイングも行う。

(3) 読解のための Q & A 発話例

T : Is Iceland a continent?
Ss : Yes. / No.
T : No, it isn't. How do you say continent in Japanese?

Ss : TAIRIKU (大陸) !
T : Yes, continent means TAIRIKU. Is Greenland a continent?
Ss : No, it isn't.
T : No, it isn't. Greenland is also an island. So, how about Australia? Is Australia a continent?
Ss :Yes!
T : Yes, it is. What did Aya use to check the information?
Ss : Internet!
T : She ...? (主語を示唆する)
Ss : She use the Internet.
T : She use? (板書して use に下線を引く)
Ss : She used the Internet.

答える時は、常に<主語+動詞>を付けて、時制と数を意識させるように繰り返している。板書をしてヒントを出す時もある。

(4) 個別の英問英答例

T : All right, I will ask you questions one by one. Who is the first? Kenta, Is Iceland a continent, or an island?
S1 : I don't know.
T : Kenta was sleeping, so he doesn't know the answer. Stand up, Kenta. Wait for the next chance.
 — Go on to another student. —
T : Megumi, Is Iceland a continent?
S2 : No, it isn't.
T : No, it isn't. Good! Next, how do you say continent in Japanese?
S1 : (Raises his hand and says) TAIRIKU.
T : All right. You can sit down.

一斉質問したものを再度一人ずつ聞いて確認、定着を図る。一人ずつ聞くと意外に答えられない生徒もおり、実は分かっているという生徒を見つけるのに役立つ。答えられなければ、立って次の機会を待ち、答える時は挙手する。ゲーム感覚でできることが望ましい。

(5) 既習事項を使って英文を作るペアワーク

T : Now, please make pairs and ask questions by using what is the most ~ in the world.

S1 : I don't have a partner.
T : Then make a group of three. Everyone, stand up! When you finish, what will you do?
Ss : Sit down!
T : Okay. Let's start!

本文の最上級を参考にして、「世界一～なAは何ですか?」を作る練習をする。一斉指導を行なった後、2人でオリジナルの英文を作り、やりとりできたら着席する。巡回しながら、多少の日本語は許容しつつ生徒を支援する。

(6) デモンストレーション

T : All right, everybody finished. It's time for demonstration.
 Are there any volunteers? Or I will choose pairs.... Shogo and his partner. Stand up, please. Everyone, stop talking and listen carefully.
S1 : What is the tallest tower in the world?
S2 : TOKYO SKYTREE is.
T : Shogo, you can choose the next pair.
 — Another pair work —

起立してデモンストレーションをし、その間はペアに集中するよう指示する。大きく間違えていたら言い直させ、板書に正しい文を書いたりする。

(7) 廊下でできる30秒スピーキングテスト

T : Hello, Naoya.
S : Hello, Mr. Shimura.
T : What time did you go to bed last night?
S : I go to bed at eleven.
T : Please ask a question using "Where."
S : Where did you go last Sunday?
 (下線部が主な評価ポイント)
T : I went to my mother's home to see her.
S : I see.

授業中、別室や廊下などを使い、次々に行かない1時間程度で終わらせるようにする。When, Where, What のいずれかを用いて質問し、教師からの質問に答える。質問に対する答えと発問の二つをAttitudeやFluencyを加味し、それぞれ5段階で付ける。検定試験ではないので、聞き直したりして、応答が成立するように励ます。

3 「書く」指導について

教科書本文の文法事項を使い、身近な話題で文を作る。語数については、2～3文⇒30～50語程度と段階的に増やして行きたい。Lesson 6では、次のような英作文指導を行なった。(5)を除いては一斉指導して、設問はそのまま考査で出題。きちんと作れば満点が取れるので毎日生徒が添削に来た。

- (1) What can you do on the Internet? We can ~ から始め、5文を作りなさい。
- (2) Make a sentence by using "It seem that"
- (3) what to, where to, when toを用いた文を、下欄の書き出しより組み合わせ作りなさい。
 [I know, I don't know, Please tell me, I'll show you]
- (4) 「世界一～な…は何ですか?」という疑問文を作りなさい。
- (5) Do you think high school students are using the Internet too much?
 英語で反対・賛成を答え、理由を説明する意見を述べる作文もオプションで行なった。

4 まとめ：表現力と定着をねらって

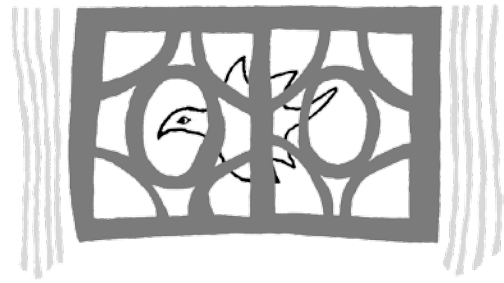
外部テストなどを見ると、やはり身近な話題で英文を作ってやり取りした文法事項が、良く定着しているようである。英検受験者も増加しており、それに伴い準2級の合格者も増えている。リスニングや会話に対する抵抗感が減ったことと、大きく関連していると考えられる。

定期考査で特に意識しているのは、自由記述とディクテーションである。自由英作文は毎回テーマを決め、授業で生徒の発想を取り入れながら、各クラスモデル文を作っている(Class Writing)。その後、それをアレンジして事前に添削してもらえば、手間はかかるが得点源となる。聞き取り問題も毎回考査で出題しており、日頃の生徒の音読やリスニングの取組みが、成果として出せるように心がけている。

2015年度 センター試験の 分析と対応

渡辺 聡

東京学芸大学附属特別支援学校



筆記

1. 全体的な傾向

今年のセンター試験[筆記]でもコミュニケーション能力と読解力を試す出題がなされた。設問形式が若干変わった箇所はあるが、全体的な傾向は変わっていない。レベルとしては例年通り基本的な問題が多く、平均点は116.17点と、昨年度の118.87点より若干下がった。総語数は昨年度より200語ほど増加し、4,400語弱となった。

コミュニケーション能力をみる問題としては、
第1問A：単語をきちんとした音で発話する能力
第1問B：単語を正しいアクセントで発話する能力
第2問C：ある発言に対し、適切な応答を考える能力
第3問A：対話がスムーズに流れるよう、適切な発話を考える能力
第3問C：発言の内容を要約する能力
が例年通り求められている。

また読解力では、
第3問B：パラグラフ単位で文章の構成を論理的に思考する能力
第4問：グラフや表、説明文を参考にして文章を正確に読み取る能力
第5問：メールのやりとりを読み、主旨を正確に把握する能力
第6問：論説文の流れを正確に追い、論の展開をつかみながら長文を読み取る能力
が試される。いずれも文章の全体的な流れをつかんだ上で、的確な情報を読み取る日頃の学習姿勢が問われる。

2. 具体的内容分析

<第1問>

形式と問題数、配点は昨年度と同じ。

A 発音 (6点：問数3)

基本的な単語の発音(母音が2問、子音が1問)を問う問題。カタカナにしたときのアクセントに惑わされやすい語(handle, handsome〔問1〕、hook〔問2〕、mission〔問3〕)も例年通り複数出題された。

B アクセント (8点：問数4)

単語のアクセントのある箇所を問う問題。昨年度と同様、今年度も2、3、4音節の語が出題された。カタカナにしたときのアクセントに惑わされやすい語(success〔問1〕)も例年通り出題される等、個々の語の正確なアクセントが問われる。

<第2問>

昨年度Cの語句整序がBになり、Cが新傾向の出題となった。第2問全体での問題数、配点は昨年度と同じ。

A 語彙、語法、文法 (20点：問数10)

語彙、イディオム、動詞の用法等を判断する問題。時制(〔問4〕〔問5〕〔問10〕)や使役動詞(〔問2〕)、分詞構文(〔問6〕)の問題は頻出である。イディオムやコロケーションの力を併せて要求する問題(know better than + O〔問1〕、in that S + V〔問3〕)も多い。基本的な動詞や疑問詞の使い分け方(hopeとwish〔問4〕、whatとhow〔問8〕)、関係詞、不可算名詞や同義語等の幅広い知識も合わせ持っておきたい。

B 語句整序 (12点：問数3、マーク数6)

各文の中に含まれる語彙・語法を使い、意味の通る文にする問題。動詞の用法(charge + O₁ + O₂〔問2〕)は必出である。文法(仮定法過去完了〔問1〕や付

帯状況等)も併せて確認しておきたい。

C 応答文完成 (12点：問数3)

与えられた語句を組み合わせ、対話に即した文にする問題。文法や語法の知識だけでなく、No way!〔問3〕等の発言から、対話の流れも考え合わせる。
<第3問>

昨年度第2問Bの対話文完成がAになった。問題数、配点は昨年度と同じ。

A 対話文完成 (8点：問数2)

対話文を完成させる問題。空欄の前後の対比(a new jacketとmy own jacket〔問1〕)を読み取り、空欄で何を言っているのかを次のせりふから導く(Now I know ~からIt turned out ~を〔問2〕)。代名詞(That〔問1〕選択肢)の指す内容を文脈から読み取る力も求められる。会話でよく使われる表現にも慣れておきたい。

B 不要文選択 (15点：問数3)

パラグラフのまとまりをよくするために取り除いた方がよい文を1つ選ぶ問題。まず、第1文からキーワードを読み取る(stamp collecting〔問1〕、salt〔問2〕、TV shows〔問3〕)。不要な文にもキーワードは含まれているため、前後の文との関連性に気をつけ、漫然と読み流さないようにしなければならない。

C 発言の意図の要約 (18点：問数3)

2人の発言の要旨を選ぶ問題。ある事柄を別の表現で言い換える(a set of unusual eventsをstrange happenings around usで〔空欄32〕)ことが多い。また、Lilyの最初のせりふ第6文のwe humans also do the sameのdoは何を指すかも理解し、発言の主旨をまとめる柔軟な読解力が必要とされる。

<第4問>

形式と問題数、配点は昨年度と同じ。

A グラフ読み取り問題 (20点：問数4)

グラフを参考に、展開される論からの確かな情報を得る力を問う問題。本文で与えられた情報を順次グラフに当てはめ、情報の内容を言い換えた表現を読みこなす。第2段落の第4文の,with teachers slightly more likely to see high riskで、Very riskyの棒グラフから(B)が教師、(C)が親であると読み取る〔問1〕。グラフはあくまでも補助的なものであり、基本は説明文を正確に読めるか、が問われる。最終段落に続く話題を考えさせる問題〔問4〕も昨年度に引き続き出題された。

B ウェブサイト読み取り問題 (15点：問数3)

ウェブサイトから適切な情報を読み取る問題。設問を読み、与えられた条件をもとに、合致する情報がどこにあるのかを探し出していく。問いに関する情報は上から順に出てくるわけではないので、設問の求める情報がある箇所(複数の情報を合わせる場合もある)を的確につかむことが大切である。

<第5問> (30点：問数5)

形式と問題数、配点は昨年度と同じ。イラストを選ぶ問題はなくなった。

2人のメールから、父親の心配と先生のアドバイスを読み取る。Mr. Okamotoのメール第1段落第3文のshe seems to get along well with other students in the classと第4段落第1文のI ... feel confident she will establish friendships sooner or later on her own. が、選択肢のAnna will make friends without any special help.とまとめられている〔問4〕ことを読み取る。それぞれのメールから、ある事項に対する意見を丁寧に拾い上げていく。

<第6問> (36点：問数6、マーク数9)

形式と問題数、配点は昨年度と同じ。

各段落の内容を正確に読み取り(設問A)、段落の要旨を順に並べる設問(設問B)の2本立て。各段落のポイントをつかみ、話がどのように展開し、主題は何か、という広くかつ深い読解力が求められる。また、ここでも、正解の選択肢は本文で使われていない単語や表現で求められる場合も多いので、基本的な類義語を理解する力も必要である。

3. 昨年度から変化のあった点

- ①昨年度の第2問Cの語句整序が第2問Bとなった。
- ②第2問Cの応答文完成が新たな問題であった。
- ③昨年度の第2問Bの対話文完成が第3問Aとなり、昨年度の3問から2問に減った。
- ④昨年度第3問Aの意味類推は第5問、第6問の長文読解の中で出題され、配点が各6点に増えた(昨年度は各4点)。
- ⑤第5問でイラストを選ぶ問題がなくなった。

4. 新しい傾向が見られる点

- ①第2問Cの応答文完成が新たに出題された。
- ②昨年度第3問Aで出題された意味類推は、第5問、第6問の長文読解の中で出題され、配点が各2点

増えた。

5. 日頃の学習で大切なこと

①多面的に語彙を増やす

ただ単に単語の1つの意味だけを覚えるというのではなく、英語での定義、反意語、同義語、接頭辞・接尾辞、品詞の転換、自動詞・他動詞等、語彙を様々な方法で多面的に増やしたい。語彙に関連性を持たせると、未知の語に遭遇したときにも想像力を働かせてなんとか意味がつかめるようになる。また、カタカナになっている語の英語と日本語の意味の差異や発音・アクセントに注意して覚えるのも1つの方法であろう。

②語と語のつながり（語法、Collocation）に関心を持つ

ある単語を頭に入れる際、その語がどのような語と一緒に使われる場合が多いのか、英語としての語と語の自然なつながりに気を配る習慣を身につけておきたい。単独だとイメージしにくかったり、覚えにくいような単語も、自分が理解しやすい組み合わせなら、より効率的に覚えらる。

③英語を聞き、自ら口にする

アクセント・強勢・構文（主語と述語の区切れや省略等）に注意を払って日頃から英語を聞き、音読をする。単語一つひとつの音に注意を払い、そして文全体の内容を理解しながら読み進む。何回も繰り返して読み込んでいけば、なによりも英語の音に

対する興味・関心が必ずや増し、同時にリスニング試験の対策にもなり得る。

④わからない語があっても、前後関係からその意味を類推する習慣をつける

センター試験では語彙に関する知識が求められる。とはいえ、意味のわからない語は必ず出てくるものと覚悟しよう。すべての単語の意味がわからなくても主旨は理解できる、と余裕を持って文章を読み進めたい。未知語に出会うとすぐに辞書で意味を調べる読み方をしていると、類推力や想像力が身につかなくなってしまう。

⑤論理展開を重視した読解力を養う

どんな読み物でも最後まで通して読み、論の展開がどのようになっているかをパラグラフ中心に考える。接続語を手掛かりに、パラグラフがどのように構成されているか全体の論調を捉え、各パラグラフのキーセンテンスを探し、要旨をまとめる。「木を見て森を見ず」にならない大局的な読み方を心がけたい。

⑥多読を心がける

80分で4,000語を超える分量の英語を読みこなすには、普段から500～1,000語の文章をある程度のスピードで読むことを習慣とすることが大切である。授業では精読を中心に行っているが、時には様々な分野、テーマ、形式の、比較的易しい文章に多く触れるような機会を与え、分量をこなす読み方も覚えさせたい。

リスニング

1. 全体的な傾向

過去5年間ほぼ同じ出題形式である。解答数、配点いずれも昨年度と同じである。読まれる総語数(1,100語強)は昨年度とほぼ同じ。読み上げ速度は昨年度とほぼ同じで自然な感じであるが、音声面でのリダクションもあり、聞き取りにくい箇所もあったと思われる。問題音声も設問ごとに2回流された。比較的素直に英語の内容を問う基本的な問題で、平均点は昨年度よりも上がり(今年度35.39点、昨年度33.16点、一昨年度31.45点)、リスニング試験導入の2006年度以来2番目に高いものとなった。内容はいずれも生徒の日常生活や学校生活の中で起

きうる身近な話題がテーマになっている。

2. 具体的内容分析

<第1問>対話ビジュアル(12点:問数6)

❖男女2人の対話を聞き、適切なイラスト、単語、数字を選択する

❖各対話の総語数: 30語弱

イラストを選ぶ問題、数値を聞き取って計算をする問題は昨年度と同じ各2問である。対話がいつ行われているのかを問う問題は今年度なかった。最初のせりふで状況を大まかに把握し、求められる情報を的確に探し出す。対話に出てくる語(句)や数字がそのまま答えになるとは限らず、簡単な計算をする

設問もある。最初のせりふで状況をつかみ、2番目～4番目のせりふのキーワードを聞き逃さないようにする。数字を聞き取る設問が4つ出題され(〔問2〕〔問3〕〔問4〕〔問5〕)、そのうち〔問3〕〔問4〕は普段と現在を比較するものであった。数字や単位(年、月、%等)を含め、せりふの細部まで集中して聞く姿勢が問われる。on time, be delayed, an hour and a half, be supposed to〔問5〕、be in one's way〔問6〕等、日常会話でよく使われるフレーズにも慣れておきたい。

<第2問>対話応答補充(14点:問数7)

❖対話を聞き、最後の発言に対する相手の応答を選択する

❖各対話の語数: 20語弱～30語強

問11

Man : Ms. Williams, are we going to discuss our projects today?

Woman : Yes. So please make groups of five, everyone.

Man : But, um... there are 31 students here today.

選択肢

- ① OK, then let's have group projects.
- ② OK, then let's make it 30 students.
- ③ OK, then let's make one group of six. (正解)
- ④ OK, then let's start the discussion.

相手の述べたことへの自然な反応を考える。疑問文で終わる対話の設問は1つのみだった(昨年度は3)。最初の2つのせりふから会話の場面や状況を想像できるようにしたい。ここでも、right away(選択肢)〔問7〕、What about you?(読み上げ文)〔問8〕、Why don't you～?(選択肢)〔問9〕、straight ahead(選択肢)〔問12〕、check it out(読み上げ文)〔問13〕等、日常会話でよく使われるフレーズが頻出する。

<第3問A>対話内容Q&A(6点:問数3)

❖対話を聞き、その内容についての問いを読み、答えを選択する

❖各対話の総語数: 50語前後

問15

Woman : This coffee is too strong!

Man : Really?

Woman : Yeah, is the machine broken?

Man : No, it seems fine.

Woman : What could the problem be?

Man : Hmm... I don't know. I did what you told me to do.

Woman : What exactly did you do?

Man : I put 40 grams of coffee for each cup.

Woman : No, I said 14!

質問: What did the man do wrong?

選択肢

- ① He broke the coffee machine.
- ② He chose the wrong beans.
- ③ He misunderstood the directions. (正解)
- ④ He used 14 grams for each cup.

5W1Hで始まる質問の答えを対話から探す。せりふの数が9に増えたものが出題された(昨年度は8まで)。対話を最後まで聞き、状況や流れの変化をきちんととらえる。事前に選択肢を読み、最初のせりふを聞いた段階で場面が想像できるようにしたい。話者が相手に同意しているのかそうでないのかといった話の流れをつかむ力とともに、選択肢のreturnがせりふのtake～backの言い換えである〔問14〕ことを理解し、男性が14を40と聞き間違えてしまったことをHe misunderstood the directions.と置き換えている〔問15〕、といった内容を正確に把握する力も求められる。

<第3問B>対話ビジュアル(6点:問数3)

❖対話を聞き、その内容からわかることを表の空所に埋める

❖対話の総語数: 約150語

聞き得た情報を順に図表に当てはめてゆく。2つのものを比較して簡単な計算をしたり、指示代名詞が何を指すのかを考える。また、情報は上から順に出てくるとは限らない(解答欄⑧が一番最後に埋まる)ので注意が必要。

<第4問A>

Short Passage 内容Q&A(6点:問数3)

❖Short Passageを聞き、その内容についての質問を読み、答えを選択する

❖各Passageの総語数: 100語弱

問22

Palau is a country in the Pacific. It became an independent republic on October 1, 1994. Palau's flag is similar to Japan's because it features a

single circle. However, the circle is yellow, and the background is blue. Blue is used to represent the ocean, which the nation depends on for food. Unlike the Japanese flag, the circle on Palau's flag is a little off-center. Instead of the sun, as on the Japanese flag, the circle represents the moon, which is traditionally thought to be important in the life cycle and customs of the people.

質問文から事前に推測した状況をもとに、出てきた情報を一つ一つ積み重ねてゆき、求められる情報の所在を明らかにする。選択肢では答えとなる語を別の表現で言い換えたり、まとめることがある（上記下線部をthe shapeに〔問22〕場合も多いので、要点をつかむ力も求められる。

<第4問B>説明文内容Q&A（6点：問数3）

❖ 説明文を聞き、その内容についての質問を読み、答えを選択する

❖ 説明文の語数：約200語

質問文に目を通し、事前にどれだけの状況を想定できるかがポイント。あとは話の流れに沿って順に問題に当たってゆく。全体の内容を総合的に理解する力と、求められた情報を正確に取り出す力が必要とされる。ここでも、選択肢では答えとなる箇所が別の表現で言い換えられていることがある。話の流れが変わったり固有名詞も出てくる場合もあるので、メモを取りながら、質問されるポイントの個所を絞って聞くことも大切である。また、1回目と2回目の読み上げの間に約40秒のポーズがあるので、情報が出揃った段階で各問の答えを絞り、2回目は確認の作業に当てたい。

3. 対応のポイント

① 状況・場面を想像し、話の流れをつかむ

事前に問題指示文、選択肢、イラスト、状況説明文等に目を通し、内容を予測してから英語を聞く。複数の方法が提示され、途中で展開が変わり、最初に出てきた情報が最後まで同じとは限らない。方向性を予測した上で最後まで丁寧に流れを確認したい。

② 英語特有の表現に慣れる

話の展開がつかめれば自然に聞くことができるが、〔問5〕、〔問14〕、〔問15〕のような英語特有のフレーズは聞けるだけでなく、意味が自然に頭に入るまで聞き慣れておくようにしておきたい。

③ 言い換えの表現を読み取る

リスニングと言っても選択肢を読み取る力は筆記試験同様に要求される。聞き取る英語の表現がそのまま選択肢にあるとは限らず、別の形で言い換えてある場合も多くある。正答の鍵となる情報をきちんと整理する力もつけておきたい。

④ 全部完璧に聞き取れなくてもよしとする

筆記試験で英文を一字一句完璧に理解することを求める必要がないのはリスニングにおいても当てはまる。リスニングでは、聞き取れなかった箇所を悩み込んでしまうと次を聞き逃すことになる。たとえ理解できなかった部分があってもそのまま流し、「残りからさかのぼって推測すれば良い」と思うくらいの余裕が欲しい。

4. 日頃の学習で大切なこと

① 英語の音を聞き、その音を口にする活動を習慣にする

「継続は力なり」と言われるように、1日5分間でも英語を聞き続けることが大切である。様々なメディアを使って英語の音やリズムを継続的に耳に入れておくことを習慣としておいた上で、その音を真似して口に出す活動を続ける。次第に英文の流れが、意味を伴った内容となって頭に残ってくるようになるであろう。

② 聞いた内容を論理的に組み立て、考える力を育てる

リスニング力をつけるには、聞いた音を頭の中で論理的に組み立て直す作業が必要である。教科書等の、ある程度分量がある文章の内容を理解した上で英語を聞いて論の展開をつかむ。そして音読、Qs & As, dictation等の基本練習を日頃から行い、論理的思考力も養っておきたい。

③ 自分のことばで実際に表現する機会を増やす

コミュニケーションを成立させるためには、お互いの考えをきちんと伝え合うことが必要である。相手の伝えたいことを理解し、それに対して自分の意見や考えを、決まりきったパターンではなく、自分のことばで実際に表現する活動を増やしたい。

これからの時代の英語語彙学習に最適!

クラウン 発信力をアップさせる新世代の英単語帳 チャンクで英単語 Basic・Standard

投野由紀夫[編]

2色刷 B6判

Basic 288頁 定価(750円+税)

Standard 336頁 定価(840円+税)

チャンク学習で4技能を飛躍的にアップ!

チャンクで覚えれば、そのまま英作文や英会話に使えます。一つひとつの単語をより確実に覚えられるので、リーディング力ももちろんアップ。
※音声無料ダウンロード、別売音声CD(2枚組)をご用意しております。

発信力を高める2ステップ!

チャンクからセンテンスへ、2ステップの学習で、着実に発信力を高めることができます。

充実の単語情報!

フォーカスワード・単語コラム・多義語など、単語情報が満載。楽しみながら英語の理解を深めることができます。



◎ 付属品

- ▶ 問題作成ソフト
- ▶ ドリルシート(PDF)
- ▶ 確認テスト(Word)
- ▶ 本文データ(Excel)

◎

関連商品

- ▶ 音声無料ダウンロード
- ▶ 音声CD(2枚組・別売)

	大学受験	中学卒業・高校1年	高校2年	センター
CEFR-J		A1	A2	B1
英検		3級	準2級	2級
TOEIC		350点	470点	600点
対応レベル	チャンクで英単語 Basic	→		
	チャンクで英単語 Standard	→		

発信力をつける新しい英語語彙指導 プロセス可視化とチャンク学習

投野 由紀夫 著

四六判 144頁 定価(本体1,400円+税)

2020年にむけ英語教育が激変するいま、コーパス言語学・第二言語習得論などの最新知見から、真に発信力のつく語彙指導の理論と実践を丁寧に解説しました。語彙学習プロセスの見える化と、チャンクを基軸とした語彙学習の有効性を提唱。図版も多数収録し、すべての英語教師の必携書です。



三省堂 高校英語教育 2015年 夏号

- 発行 ————— 2015年6月20日 定価100円(本体93円)
- 編集・発行人 ——— 北口克彦
- 発行所 ————— 株式会社三省堂 ●ホームページ <http://tb.sanseido.co.jp/english/>
〒101-8371 東京都千代田区三崎町2-22-14
電話(03)3230-9421(編集) 振替 00160-5-54300
- イラスト ————— 只見優佳(ただみ ゆか)
- 表紙デザイン ——— 株式会社キャデック
- 印刷 ————— 三省堂印刷株式会社
〒192-0032 東京都八王子市石川町2951-9 電話(042)645-6111(代)

英語反意語辞典

富井 篤 [編]

B6変型判 576頁 4,400円

接頭辞・接尾辞をつけて形成される反意語を集めた英和辞典。反意語が複数ある場合の意味・用法の違いを巻頭の解説で示すなど、日本人学習者向けのきめ細かさを備える。総項目数約3千。本文は接頭辞・接尾辞をつける前の肯定語を見出しとして配列。反意語をキーとする索引と和英索引を巻末に付す。



クラウン 英語イディオム辞典

安藤貞雄 [編]

B6判 1,488頁 4,800円

類書中最大の総収録項目数約6万3千、用例数約5万。句義は原則頻度順表示。諺やコロケーションも幅広く収載。反意句・同意句・異形も精選して提示した。語法・文化・由来・なぞりなどの解説も充実。



クラウン 英語句動詞辞典

安藤貞雄 [編]

B6判 656頁 3,600円

類書中最大の総収録項目数約1万3千、用例数約2万6千。新しい句義・用例を大幅に増補。反意句・同意句・異形も精選して提示した。句義は原則頻度順表示し、自他の区別をロゴで明示。



■ 製品紹介サイト(三省堂)

http://dictionary.sanseido-publ.co.jp/dicts/english/ac2_app/

エースクラウン ACE CROWN ENGLISH-JAPANESE DICTIONARY SECOND EDITION 英和辞典 第2版 for iOS

「紙の長所」+「電子の長所」

AppStoreで

「三省堂エースクラウン」を検索!

通常価格: 1,900円



三省堂

〒101-8371 東京都千代田区三崎町2-22-14 ☎03(3230)9411<編集>・9412<営業>
<http://www.sanseido.co.jp/> *表示価格は本体価格